風都国立大学付属高等学校（仮）

奇跡的な人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風都国立大学付属高等学校（仮）

【Ｎコード】

Ｎ２５７５Ｘ

【作者名】

奇跡的な人間

【あらすじ】

仮面ライダーやさまざまなアニメが混合・融合した世界。もちろん、この世界も独立した世界であり、それぞれの世界の人物もいれば、この世界にしかいない人物もいる。※現在、仮面ライダーキバ、仮面ライダーＷ、仮面ライダーアギト、バカとテストと召喚獣が混合・融合しています。

舞台・用語（前書き）

タイトルは仮なので、この小説をお読みなってくれた方は、いいタイトルを感想に書いて教えてください。

舞台・用語

舞台

- 風都（ふうと）

本作品の舞台となる、仮面ライダーWの世界にも存在した架空の都市。

街の至るところに様々な形状の風車が回る、通称「エコの街」。「ふうとくん」という街のマスコットキャラクターが人気者である。この町の名物は、普通のラーメン屋の屋台で売っている、巨大なナルトが特徴的な風麺。

自称・ハードボイルド探偵の翔太郎を始め、多くの住民に愛されている一方、裏ではミュージアムやそのほかの悪の組織・怪人が暗躍するための活動拠点のような都市として、暗黒的な側面も持っており、近年ガイアメモリによる犯罪も増加している。

- 風都国立大学付属高等学校（ふうとこくりつだいがくふぞくこうとうがっこう）

主人公やメインキャラが通る高校。制服は決まっておらず、私服のものや、学生服、ブレザーを着ている人など服装が適当な学校。学校の電気は全て風力発電。ガイアメモリを所有する人もいれば、怪人がいる、奇妙な学校。反面、都市伝説の仮面ライダーがいるという噂がある学校。左翔太郎も通っていたらしい。

- 風都国立大学付属中学校（ふうとこくりつだいがくふぞくこうとうがっこう）

風都国立大学付属の中学校。偏差値はそれなりに高い。

- 鳴海探偵事務所（なるみたんていじむしょ）

自称・ハードボイルド探偵の左翔太郎が勤める（？）探偵事務所。

パッとみ中学生の鳴海亜樹子が所長を勤める。事務所の社員である左翔太郎とフィリップがこの町の都市伝説の仮面ライダーであることを知っている人はほんのわずか。

- ガイアメモリ
ＵＳＢメモリ型の生体感応端末。人をドーパントにしたり、仮面ライダーにしたりすることができる。

- ドーパント
装着者が自分の肉体にガイアメモリ内の「地球の記憶」を挿入し、その記憶を宿した怪人となった姿。

- 仮面ライダー
風都に現れる怪人をたおすバイクのりの戦士。今のところ判明しているのは仮面ライダーＷのみ。これからも増える予定。

舞台・用語（後書き）

前述のとおり、タイトルは仮なので、この小説をお読みなってくれた方は、いいタイトルをかｎ（ｒｙ

キャラ設定（前書き）

キャラ設定キターーーー！！（宇宙キターーーー！！風に）

キャラ設定

風都国立大学付属高等学校

―登場確定陣

松風翔平（まつかぜしょうへい）［登場確定］

今作の主人公。この世界にしか存在しない人間。風都国立大学付属高等学校に通う生徒。クラスは２－Ｂ。個性的な人間が多い学校の中では常識人。成績優秀で容姿も良く、友達思いの優しい性格のため、彼への信頼も厚く、友達も多いためクラスの人気者。自分の通う学校の都市伝説を信じてはいなかったが、同じクラスのフィリップが仮面ライダーＷに変身したのを見て以来、鳴海探偵事務所に通い始め、Ｗのサポートをするようになる。園咲若菜のファン。フィリップとは当初余り相手にされなかったが、自身も園咲若菜のファンということをフィリップが知ってからは、良く園咲若菜のことについてはしたりしている。如月弦太朗と城島ユウキとは幼馴染。

フィリップ［登場確定］

仮面ライダーＷの世界にもいた魔少年。風都国立大学付属高等学校に通う生徒。クラスは松風と同じ２－Ｂ。鳴海探偵事務所の居候。仮面ライダーＷに左翔太郎と共に変身する。Ｗの右側。フィリップという名前は本名ではない。記憶喪失。彼が学校へ行く理由は特になく、ただ探偵事務所の自称・所長の鳴海明子が行けといってるだけであって、本人は乗り気ではない。授業中や休み時間では真っ白な本を読んでるため、周囲から不思議くんと認識されている。時々昼寝をしているように見えるが、それは翔太郎とＷに変身するときに意識が翔太郎に行くため、体は空になるからである。学校では怪しまれないため（すでに別の意味で怪しまれてるが）、翔太郎の弟を装い、「左将暉（ひだりまさき）」と名乗っている。しかし、クラスメイトからは

偽名ではなく、愛称のフィリップで呼ばれている。園咲若菜のファン。

クイーン［登場確定］
仮面ライダーWの世界でエリザベスとよく一緒にいた人。本名は「板野友美」。クラスは１－Ａ。趣味はカラオケで、エリザベスとよく一緒に行く。歌唱力はプロ並み。翔平に憧れを抱いている。

エリザベス［登場確定］
仮面ライダーWの世界でクイーンとよく一緒にいた人。本名は「河西智美」。クラスはクイーンと同じ１－Ａ。趣味はカラオケで、クイーンとよく一緒に行く。歌唱力はプロ並み。フィリップのファン。

紅渡（くれないわたる）［登場確定］
仮面ライダーキバの世界にもいたこの世アレルギーの患者。人間とファンガイアのハーフ。クラスは３－Ａ。この世界ではこの世アレルギーではない模様。

紅正夫（くれないまさお）［登場確定］
仮面ライダーキバの世界にもいた未来人。約２０年後の未来から来た紅渡の息子。クラスは２－Ｂ。翔平とは親友。

―登場未定陣
如月弦太朗（きさらぎげんたろう）［登場未定］
仮面ライダーフォーゼの世界にもいたトラッシュ。風都国立大学付属高等学校の転校生。クラスは２－Ｂ。転校初日、学校へ行く途中フィリップが一年生からラブレターをもらっているのを見ていて、フィリップが興味深いと無神経なことに腹を立て、フォーゼの第１話の賢吾とのやり取りみたいになった。リーゼントに短ラン・Ｔシ

ャツ・ボンタンの学生服を着用。その格好はまるで一昔前の不良の格好。そして、教室に入ってきて、「この学校の生徒全員と友達になる」と宣言する。翔平や城島ユウキとは幼馴染。風都国立大学付属高等学校にはヒエラルギーが無いため、この世界ではトラッシュ呼ばわりはされない。

城島ユウキ（じょうじまゆうき）［登場未定］
仮面ライダーフォーゼの世界にもいた宇宙オタク。クラスは２－Ｂ。翔平や弦太朗とは幼馴染。翔平を「翔くん（翔太郎が風都イレギュラーズから翔ちゃんといわれるため、こちらはくん付けになっている）」、弦太朗を「弦ちゃん」と呼ぶ。

乾巧（いぬいたくみ）［登場未定］
仮面ライダーファイズの世界でファイズとして戦っていたオルフェノク。クラスは３－Ａ。

園田真理（そのだまり）［登場未定］
仮面ライダーキバの現代編でクイーンの称号を手に入れた人にそっくりな人。クラスは１－Ｂ。

風谷真魚（かざやまな）［登場未定］
仮面ライダー電王の世界にいたデンライナーでアルバイトをしている客室乗務員の人に似ている。クラスは２－Ｃ。

泉比奈（いずみひな）［登場未定］
仮面ライダーオーズの世界にもいた怪力ブラコン。クラスは２－Ｂ。

野上良太郎（のがみりょうたろう）［登場未定］
仮面ライダー電王の世界にもいた運勢最悪のシスコン。クラスは２－Ｂ。

風都国立大学付属高等学校、教職員

上原千恵（うえはらちえ）［登場未定］
翔平達のクラスの担任。数学担当。

木村京平（きむらきょうへい）［登場確定］
英語教師。生活指導主任教師。

風都国立大学付属中学校

天道樹花（てんどうじゅか）［登場未定］
仮面ライダーカブトの世界にもいた「天の道を往き、樹と花を慈しむ少女」。クラスは２－Ｃ。兄がいる。野村静香とは友達。

野村（のむら）　静香（しずか）［登場未定］
仮面ライダーキバの世界にもいたドラムが得意なバイオリニスト。クラスは２－Ｃ。天道樹花とは友達。バイオリンを習うために紅家によく出入りする。

鳴海探偵事務所

左翔太郎（ひだりしょうたろう）［登場確定］
仮面ライダーＷの世界にいた人と同一人物のハーフボイルド。ソフト帽を愛用している。自称・ハードボイルドだが、中身はよくも悪

くもお人好しの三枚目であるため、周囲に人々からは、「ハーフボイルド（半熟君）」呼ばわりされている。しかし探偵術、護身術はそれなりに優秀であり、不測の展開では機転を利かせることも多く、探偵には向いている。風都では非常に幅広い交友関係と情報網を持っているため、街の人々からの信頼は厚い。仮面ライダーWでは、名前のとおり、左を担当。ビギンズナイトでは、師匠である鳴海壮吉からフィリップのことを，「ガイアメモリの悪事に利用されている高校生」と聞いていたため、フィリップを無理矢理高校に行かせるきっかけを作ってしまった。風都国立大学付属高等学校に通っていた。

フィリップ［登場確定］
『風都国立高等学校』を参照

鳴海亜樹子（なるみあきこ）［登場確定］
仮面ライダーWの世界にもいた、大阪育ちの人。鳴海探偵事務所の所長兼大家。２０歳だが童顔で子供っぽい性格のため、初対面の人にからは女子中学生だと思われる。「私、聞いてない！」が口癖。大阪育ちのためか、（スリッパを利用した）つっこみが得意。翔太郎からフィリップはもともと、「ガイアメモリの悪事に利用されている高校生」と聞き、高校生なら高校に行くべきと勝手にフィリップを学校に行かせた。

ＯＴＨＥＲ
名護啓介（なごけいすけ）
仮面ライダーキバの世界でもイクサに変身ていた御方。仮面ライダーイクサに変身する。即婚者。

キャラ設定（後書き）

ちなみにこのキャラ設定は仮なので、変わったりもします。話が進むごとに更新するのでチェックしてください。

第０１話ーＦの戦士／緑と黒の仮面ライダー（前書き）

サブタイトルのように、今回Ｗが出てきます。

第０１話ＩＦの戦士／緑と黒の仮面ライダー

俺には、信じていないものが二つある。ひとつは塾の先生の年。まあ、クラスのみんなも信じていはいないが。もうひとつは、都市伝説の仮面ライダー。仮面ライダー、俺の住む風都にたびたび現れ、怪人を倒し、バイクに乗って変える、仮面をつけた戦士。しかも、俺の通う風都国立大学付属高校には仮面ライダーがいるという噂。ただの都市伝説だと思っていた。なのに、まさか実際にクラスメイトが仮面ライダーに変身するのを見るとはな。

―昨日、いつもどおり学校に行ったんだ。

木村「はい、ｓｔａｎｄ－ｕｐ!」

英語の先生は、いつもどおり英語で号令を始めた。

木村「はい・・・礼」

担任の木村は、いまだに英語で礼が言えない。

木村「ｅｖｅｒｙｏｎｅ　ｓｅｔ　ｄｏｗｎ・・・出席をとる、城島」

先生が出席をとってる中、話しかけてくるやつがいた。友達の紅正夫だ。

正夫「ねえ翔平、今日カラオケいかない？」

翔平「ん～、わりい。テストの予習しねーといけねーから無理だ。また今度な、」

正夫「ちぇっ、翔平いねーと盛り上がらないんだよな、」

今思えば行ってりゃよかったかな、カラオケ。別にテストって言ってもどうせ中学の応用問題だし。

木村「左、呼んだら返事しろ」

先生が話しかけているのに変わらず本を読んでいるやつがいる。左将暉、通称・フィリップだ。

フィリップ「ブツブツブツブツ・・・ほう、これは興味深い。」

木村「話を聞いているのか」

フィリップ「先生、あいにくあなたの興味のわかない授業を聞くほど、僕は暇じゃない、」

木村「なんだと！」

正夫「あ～あ、また始まった。」

翔平「あいつ、ホント何考えてるんだ？いつも真っ白な本読んでたり、たまに何かつぶやいたり、ＵＳＢメモリいじっていたり、寝ていたり。」

このときまで、俺はあいつをただの変人だと思っていた。

―事件は帰り道に起こった

帰り道、商店街を歩いていると空からいきなり針が落ちてきた。ギリギリあたりはしなかったが、あたっていたら体を貫いていただろう。

翔平「なんだ！？」

とっさに空を見上げた。そこにはハチを思わせる怪人がいた（決し

てメ・バヂス・バではない）。
キャアアアアアアアア！
周囲が驚いて逃げ回っている。
翔平「・・・怪物？」
ハチの怪人「ふん、次ははずさないぞ・・・松風翔平！」
翔平「えっ、何で俺の名前知って・・・」
ヒュン
また変な針が飛んできた。
翔平「うわ！なんなんだ、あいつ？」
翔太郎「あいつぁドーパントだ」
突然、背後から声が聞こえた。そこにはソフト帽をかぶった探偵風の人がいた。
翔平「あなたは？」
翔太郎「俺か？俺はハードボイルド探偵の・・・左しょうt・・・ぶほっ！」
亜樹子「何言っとるんじゃ半熱の癖に！あっ、私は、鳴海探偵事務所の美人所長、鳴海亜樹子ねっ！ちなみにこっちはハーフボイルド探偵の左翔太郎、」
翔平「はあ・・・」

翔太郎さんが格好をつけながら自己紹介をしているのを、亜樹子さんがスリッパを使って豪快に突っ込み、自己紹介を再度始めた。

フィリップ「そんなことより翔太郎、いくよ？」

翔平「えっ、フィリップ！？」
突如現れたクラスメイトにびっくりした。

翔太郎「おっ、フィリップのクラスメイトか、いや～あいぼ・・・じゃなくて弟が世話になっているぜ。」

翔平「フィリップのお兄さんなんですか！？」

翔太郎「ん？あっ、ああ。それよりフィリップ、行くぜ」
そういうと翔太郎さんがダブルドライバーを腰に巻いて、それと同時にフィリップの腰にダブルドライバーが現れた。そして翔太郎さんは黒の、フィリップは緑の少し大きめのＵＳＢメモリを出した。

ジョーカーメモリ（黒）「Ｊｏｋｅｒ！」

サイクロンメモリ（緑）「Ｃｙｃｌｏｎｅ！」

翔太郎・フィリップ「「変身！」」
変身と叫んだ後、フィリップはドライバーにサイクロンのＵＳＢメモリをいれた。その直後、サイクロンメモリは翔太郎のドライバーに移動して、フィリップが倒れた。そしてそれを亜樹子さんが見事にキャッチした。そして翔太郎さんはもう一本のメモリ、ジョーカーメモリを入れた。

ダブルドライバー「Ｃｙｃｌｏｎｅ－Ｊｏｋｅｒ！」

翔太郎さんの体を風が包み、そこに現れたのは、右半分緑、左半分黒の戦士だった。

Ｗ－ＣＪ「「さあ、お前の罪を、数えろ！」」

翔平「仮面・・・ライダー？」

俺は無意識にそうつぶやいていた。

第０１話ーＦの戦士／緑と黒の仮面ライダー（後書き）

蜂のドーパントはメ・バヂス・バではありませんが、姿はそっくりです。

第０２話ーＦの戦士／お前の罪を数えろ（前書き）

第2話です

第０２話ーＦの戦士／お前の罪を数えろ

前回のあらすじ：
木村「左、呼んだら返事しろ」
フィリップ「・・・ほう、これは興味深い。」
木村「話を聞いているのか」
フィリップ「先生、あいにくあなたの興味のわかない授業を聞くほど、僕は暇じゃない、」

翔太郎「フィリップ、行くぜ」
ジョーカーメモリ（黒）「Ｊｏｋｅｒ！」
サイクロンメモリ（緑）「Ｃｙｃｌｏｎｅ！」
翔太郎・フィリップ「「変身！」」
ダブルドライバー「Ｃｙｃｌｏｎｅ－Ｊｏｋｅｒ！」
Ｗ－ＣＪ「「さあ、お前の罪を、数えろ！」」
翔平「仮面・・・ライダー？」
俺は無意識にそうつぶやいていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊

Ｗ－ＣＪ「「さあ、お前の罪を、数えろ！」」
そういってＷはバトルを始めようとした。しかし、蜂のドーパントは舌打ちをしながら早々に帰っていった。

Ｗ－ＣＪ「くそっ、あのヤロー、どこ行きやがった！」
そういって翔太郎さんは変身をといた。それと同時にフィリップが起きた。

フィリップ「しかし、あのドーパントは君を襲っていた。となると、犯人は君に恨みを持っているものだね、」

翔平「お、おい。ち、ちょっと待ってくれないか！？
話の内容が待ったくつかめないですが！？」
突然わけの分からない話をされて、質問せざるをえねかった。

翔太郎「ん、ああ、だったらうちの探偵事務所にこいよ。そこで話してやる。」

翔平「はあ・・・」
というわけで、

鳴海探偵事務所に来た。

そして秘密基地のような場所に入った。
すげえな、ホワイトボードの数。

翔太郎「まず、あの怪人のことだけどな、あれはドーパントだ。」
翔平「どーぱんと？」
翔太郎「まず、こいつを見な、」
そういうと、翔太郎さんはパソコンに翔太郎さんやフィリップがWに変身するのに使ったＵＳＢメモリに似たメモリの写真を出した。
翔太郎「こいつはガイアメモリつってな。こいつは地球の記憶を内蔵していて、これを使って変身したのがドーパントだ。」
フィリップ「ちなみに、さっき検索した結果、さっきのドーパントのメモリの名前はビー、蜂の記憶を司っている。」
翔平「いや、普通に見ても蜂って感じしたけどな、それよりアイツなんで俺を襲ったんだ？」
フィリップ「普通に考えると装着者は君に恨みを持っているね。何か心当たりは？」
翔平「んーどうだろう、あっなんかわすれているよーな・・・あー！！」
時計を見た。あと少しで塾が始まる時間だった。
翔平「わりい塾いかねーと、じゃな！」
結局塾に遅れたが、自分に恨みを持つものは思いつかなかった。
―そして現在に至る―
俺に恨みを持つものねえ・・・つーかうちの高校に仮面ライダーが

いる噂って確かだったんだ。犯人見つかったら「園咲若菜のヒーリングプリンセス」の風都ミステリーツアーにはがき出そうかな、うちの高校に仮面ライダーいるって。

フィリップ「で、あれから思い当たる人見つけたかい？」

翔平「ん～全く・・・あっ、ひとつ思い出した」

フィリップ「なんだい？」

翔平「いや～実はさあ・・・中学のとき理科の先生が生徒にセクハラしてさあ、俺も好きな先生じゃなかったからさその先生のパソコンにハッキングしてあの人のばれるとやばいこと校長にメールしたんだよ。まあ、結局その先生の教育職員免許は処分されたらしいけど、」

フィリップ「なるほど、君のせいで人生が終わった。君に復讐するためにメモリを使った、か・・・なるほど、条件は完璧だね。後は居場所を検索する必要がある。」

翔平「えっ、どうやって・・・」

フィリップは地球の本棚（ほしのほんだな）に入り、犯人の検索を始めた。

フィリップ「キーワードは蜂、セクハラ、中学理科教師、そして・・・松風翔平」

そういうと、フィリップは真っ白な本を読み始めた。

フィリップ「なるほど、犯人の名前は港文也（みなとふみや）。彼の住むマンションは・・・」

バリイイイン！！

外から針が飛んできた。外には、ビードーパントがいた。

フィリップ「せっかく検索したのに、無駄になったな・・・」

翔太郎「仕方ねえだろ、フィリップ、」

翔平「翔太郎さん？どうしてここに！？」

翔太郎「ああ、それか。きっとドーパントはお前を襲うと思ってな、」

フィリップ「それよりいこう、翔太郎、」

翔太郎「ああ、フィリップ」

サイクロンメモリ「Ｃｙｃｌｏｎｅ！」

ジョーカーメモリ「Ｊｏｋｅｒ！」

翔太郎・フィリップ「「変身！」」

ダブルドライバー「Ｃｙｃｌｏｎｅ－Ｊｏｋｅｒ！」

翔太郎さんの体はたちまちＷになり、フィリップは倒れた。

翔平「おっと」

Ｗ－ＣＪ「ナイスキャッチだよ」「よっしゃ、行くぜ！」

Ｗ－ＣＪ「「さあ、お前の罪を数えろ！」」

ビードーパント「またお前か！」

Ｗ－ＣＪ「そこ、お前達、だよ」「だな！」

Ｗとビードーパントが戦い始めた。しかし、ビードーパントは空を飛べるためＷは不利だった。

Ｗ－ＣＪ「だったらこいつだ！」

トリガーメモリ「Ｔｒｉｇｇｅｒ！」

ダブルドライバー「Ｃｙｃｌｏｎｅ－Ｔｒｉｇｇｅｒ！」

Ｗの左半分の色が黒から青に変わった。そして胸元にトリガーマグナムが現れた。

Ｗ－ＣＴ「よっと」

ビードーパント「うわっ、そんなのありか！？」

Ｗ－ＣＴ「翔太郎、メモリブレイクだ、」「ああ！」

トリガーマグナム「Ｔｒｉｇｇｅｒ！マキシマムドライブ！」

Ｗ－ＣＴ「「トリガーエアロバスター！」」

そう言ってトリガーマグナムから緑色の小型竜巻を連続発射され、ビードーパントを吹き飛ばした。そしてドーパントの変身が解け、メモリがこなごなに砕けた。

シュウウウ↑Ｗの変身解除音

港文也「う、うう・・」

翔平「ええ・・・と」

港文也「お前のせいで、俺は・・・」

翔平「・・・・・・」

港文也「俺は、お前よりもまじめに生きていたのに、どうして俺はあんな惨めな仕打ちにあったんだ・・・俺は！」

翔平「確かに、俺は罪を犯した。だが、あんたも罪を犯した、違うか？」

港文也「うう・・・」

翔平「俺の罪はハッキングをしてアンタの情報を外にもらしたことだ。俺は俺の罪を数えたぞ。今度はあんたの番だぜ。さあ、お前の罪を数えろ、」

港文也「な・・・に」

港文也は力尽きてその場に倒れた。

―そして―

事件は何とか丸く収まった。しかし、まさかあの都市伝説の仮面ライダーとうちの学校の噂が両方とも事実だったとはな・・・ハガキ・・出すか

正夫「なあ、翔平今日こそカラオケ行こうぜ！」

翔平「ああ、Ｆｉｎｇｅｒ　ｏｎ　ｔｈｅ　Ｔｒｉｇｇｅｒ歌おうぜ」

渡「ダメだよ正夫、家帰って宿題やらないと、」

俺と正夫がカラオケ行く話をしていると、正夫の兄さん、渡さんが止めた。

正夫「分かったよ～パパ～ン・・・」

パパン？俺はいつも思っていた。兄弟なのになぜパパと呼ぶのか。

第０２話ーＦの戦士／お前の罪を数えろ（後書き）

今回の港文也とのやり取り、鳴海壮吉とマツのやり取りをまねしました。

第3楽章ーNEWキバ・ウェイクアップ！（前書き）

今回、正夫のキバが出てきます

第3楽章ーNEWキバ・ウェイクアップ！

前回のあらすじ：

翔太郎「まず、あの怪人のことだけどな、あれはドーパントだ。」

翔平「どーぱんと？」

翔太郎「こいつはガイアメモリつってな。こいつは地球の記憶を内蔵していて、これを使って変身したのがドーパントだ。」

フィリップ「ちなみに、さっき検索した結果、さっきのドーパントのメモリの名前はビー、蜂の記憶を司っている。」

翔平「いや～実はさあ・・・中学のとき理科の先生が生徒にセクハラしてさあ、俺も好きな先生じゃなかったからさその先生のパソコンにハッキングしてあの人のばれるとやばいこと校長にメールしたんだよ。まあ、結局その先生の教育職員免許は処分されたらしいけど、」

フィリップ「なるほど、君のせいで人生が終わった。君に復讐するためにメモリを使った、か・・・なるほど、条件は完璧だね。後は居場所を検索する必要がある。」

フィリップ「キーワードは蜂、セクハラ、中学理科教師、そして・・・松風翔平」

フィリップ「なるほど、犯人の名前は港文也(みなとふみや)。彼の住むマンションは・・・」

バリイイイイン！！

外から針が飛んできた。外には、ビードーパントがいた。

フィリップ「せっかく検索したのに、無駄になったな・・・」

トリガーメモリ「Ｔｒｉｇｇｅｒ！」

ダブルドライバー「Ｃｙｃｌｏｎｅ－Ｔｒｉｇｇｅｒ！」

Ｗ－ＣＴ「翔太郎、メモリブレイクだ、」「ああ！」

トリガーマグナム「Ｔｒｉｇｇｅｒ！マキシマムドライブ！」

Ｗ－ＣＴ「「トリガーエアロバスター！」」

港文也「俺は、お前よりもまじめに生きていたのに、どうして俺はあんな惨めな仕打ちにあったんだ・・・俺は！」

翔平「確かに、俺は罪を犯した。だが、あんたも罪を犯した、違うか？」

港文也「うう・・・」

翔平「俺の罪はハッキングをしてアンタの情報を外にもらしたことだ。俺は俺の罪を数えたぞ。今度はあんたの番だぜ。さあ、お前の罪を数えろ、」

港文也「な・・・に」

正夫「なあ、翔平今日こそカラオケ行こうぜ！」

翔平「ああ、Ｆｉｎｇｅｒ　ｏｎ　ｔｈｅ　Ｔｒｉｇｇｅｒ歌おうぜ」

渡「ダメだよ正夫、家帰って宿題やらないと、」

俺と正夫がカラオケ行く話をしていると、正夫の兄さん、渡さんが止めた。

正夫「分かったよ～パパ～ン・・・」

パパン？俺はいつも思っていた。兄弟なのになぜパパと呼ぶのか。

――そして現在、紅家――

翔平「だからこれはこうだって！」

正夫「え～！さっぱりわからないよ！」

翔平「おい、早く宿題終わらせねーとカラオケいけねーぞ」

まっ、結局こいつ（正夫）の宿題終わらせるのに6時までかかってカラオケにいけなかった。どうして渡さんは勉強できるのに、こいつは全くなんだろう。

翔平「それじゃあ、明日な」

正夫「じゃね」

渡「またね」

―そして次の日―

翔平「よっ、フィリップ」

フィリップ「何だ君か。僕は本を読むのに集中したいんだ」

翔平「なあ、なんでお前いつも真っ白な本読んでるんだ？」

フィリップ「そうか・・・君にはこの本の文字が見えないのか・・・なあ松風翔平、君はなぜ君だか分かるかい？」

翔平「・・・哲学か？」

フィリップ「まあいいさ、君に聞いたのが間違いだったかもね、」

翔平「おい、それってどういう

正夫「翔平！」

翔平「ん、どうした正夫？」

正夫「パパンが今日はカラオケ行ってい言って！」

翔平「そうか、じゃあクイーンとエリザベスでも呼ぶか？」

正夫「おっ、いいね！」

――そして放課後――

正夫「ああ、カラオケ久しぶりだな！」

翔平「ここらへん、テストばっかりだったしな～、ストレスたまっちまうよ」

エリザベス「でもそのぶん今日はたまっているストレスをだしましょうよ！」

翔平「そうだな、クイーンも楽しもーぜ！」

クイーン「はっ、はい！翔平センパイ！」

正夫「あれ？もしかして緊張している！？」

クイーン「そ、そんなことないですよ！何言っているんですか正夫さん！」

正夫「ふーん」

翔平「おい、それよりカラオケ行くぞ。この時間帯は込んでるから

急がないと」
そう言って俺たちはカラオケに行き始めた。

でも次の瞬間・・・

――ドカアアアン！！――

エリザベス「きゃ！な、何！？」
俺たちの前でいきなり爆発が起きた。
俺たちの前にステンドガラスのような体をしたウサギを思わせる怪人がいた。

翔平「みんな、どうやらカラオケは中止のようだ、」
あれはいったい何なんだ！？ドーパント・・・とは違うみたいだし。

ウサギの怪人「ライフエナジー、いっただきま～す！」
そういうと、怪人は爆発を見てよってきた野次馬の後ろの空中に２本の巨大な牙のような物体が現れて、野次馬の肩の近くにささった。

野次馬「うわっ、なにをするんだやめｒ・・・」
野次馬が断末魔を残し、体が透明になり、

・・・消えた。

そして怪人はゆっくりとクイーンに近づいた。

クイーン「い、いや！」

クイーンはさっきの爆発のせいで足をくじいていた。

翔平「間に合え！」

俺はクイーンのところに走って、クイーンをかばった。

しかし、次の瞬間。

ウサギの怪人「ぐああ！」

？なんだ、いったい何が？そこには仮面ライダーイクサこと名護啓介がいた。

名護「ファンガイア・・・その命、神に返しなさい！」

イクサナックル「レ・デ・ィ」

ファーン…ファーン…↑イクサナックルの待機音

名護「変身！」

イクサベルト（イクサナックル）「フィ・ス・ト・オ・ン」

キィーン！ヒューン…ピロロ…キュイッピルルッジャキィーン！！

↑イクサ変身音

イクサはセーブモードからバーストモードになった。

イクサＢ－Ｍ「ファンガイア、その命、神に返しなさい！」

イクサはイクサカリバー・カリバーモードをとりだし、ウサギのファンガイアに攻撃を仕掛けた。しかし、

ウサギファンガイア「うわあああ！なんてな！！」

イクサＢ－Ｍ「何！？」

背後から複数のウサギファンガイアと親玉らしき馬のファンガイアがイクサを攻撃した。そのせいで、イクサの変身が解け、ベルトも取れた。

名護「くっ、う・・・」

ウサギファンガイア「アンタ確か、裏切り者のキングの仲間だったよなあ。そいつを殺せるとは、うれしい誤算だぜ！」

翔平「絶体絶命・・・ね」

そのとき、目の中に１ｍほど近くに落ちているイクサナックルとベルトを見た。いまはそうするしか・・・ないか！

翔平「ちょっとここで待ってな」

クイーン「えっ、」

翔平「よっと」

名護「君！」

翔平「やり方はさっき見ていた、こうすりゃいいんだな、」

俺はイクサナックルを手のひらに近づけた。

イクサナックル「レ・デ・ィ」

ファーン…ファーン…↑イクサナックルの待機音

翔平「変・・・身！」

イクサナックル（イクサベルト）「フィ・ス・ト・オ・ン」

キィーン！ヒューン…ピロロ…キュイッピルルッジャキィーン！！

↑イクサ変身音

イクサＳ－Ｍ「なるほど・・・意外と着心地はいいな。」

ウサギファンガイア「お前に俺たちをたおせるか？」

イクサＳ－Ｍ「やるっきゃないっしょ」

正夫「翔平！」

イクサＳ－Ｍ「正夫！？」

正夫「俺もいっしょに戦うぜ！こい、キバちゃん！」

キバットバットＩＶ世「わーい、祭りだ、祭りだ！」

ガブッ！↑キバットＩＶ世が正夫の手をかんで魔王力を注入した音

正夫「変身！」

そしてそして正夫の姿はみるみるＮＥＷキバ・キバフォームの姿に

なった。

イクサＳ－Ｍ「正夫も・・・仮面ライダー！？」

ＮＥＷキバ「いこう、翔平！」

イクサＳ－Ｍ「あ、ああ！」

第3楽章ーNEWキバ・ウェイクアップ！（後書き）

名護さん、全く活躍ねえ・・・・・

※正夫は設定が全く存在しないので、自分で色々設定しました。

第４楽章ｗｉｔｈフレンズ・２人のライダー（前書き）

キバ編の後編です

第４楽章ーｗｉｔｈフレンズ・２人のライダー

前回のあらすじ：
フィリップ「なあ松風翔平、君はなぜ君だか分かるかい？」
翔平「・・・哲学か？」
フィリップ「まあいいさ、君に聞いたのが間違いだったかもね、」
翔平「おい、それってどういう
正夫「翔平！」
翔平「ん、どうした正夫？」
正夫「パパンが今日はカラオケ行ってい言って！」

イクサＢ－Ｍ「ファンガイア、その命、神に返しなさい！」

翔平「絶体絶命・・・ね」
翔平「やり方はさっき見ていた、こうすりゃいいんだな、」
イクサナックル「レ・デ・ィ」

翔平「変・・・身！」

イクサナックル（イクサベルト）「フィ・ス・ト・オ・ン」

イクサＳ－Ｍ「なるほど・・・意外と着心地はいいな。」

正夫「俺もいっしょに戦うぜ！こい、キバちゃん！」

キバットバットＩＶ世「わーい、祭りだ、祭りだ！」

ガブッ！↑キバットＩＶ世が正夫の手をかんで魔王力を注入した音

正夫「変身！」

そしてそして正夫の姿はみるみるＮＥＷキバ・キバフォームの姿になった。

イクサＳ－Ｍ「正夫も・・・仮面ライダー！？」

ＮＥＷキバ「いこう、翔平！」

イクサＳ－Ｍ「あ、ああ！」

――そして――

ウサギファンガイア「よっと」

イクサＳ－Ｍ「すばしっこいヤローだなー！お前にはコイツだ！」

俺はイクサカリバーをガンモードに変形し、ウサギファンガイアたちの方向に乱れうちをした。

ウサギファンガイア「うわあああ！」

イクサＳ－Ｍ「効果覿面ってか、お前達みたいなうざいハエにはいい殺虫剤だな」

一方正夫の変身したＮＥＷキバ・キバフォームはホースファンガイアと戦っていた。

ホースファンガイア「貴様、もしかして裏切り者のキングの弟か？」

ＮＥＷキバ「いやっ、あいにく俺はその裏切り者のキングの弟の・・・息子だ！」

そういってＮＥＷキバはガルルフエッスルを出した。

キバットＩＶ世「ガルルセイバー！ピリリ・・・ピィーー！ピイイイーピィッ！」

そしてキャッスルドランの中では・・・

ドッガ「・・・誰だ？」

バッシャー「僕じゃなーい」

ガルル「・・・俺だ」

そういうとガルルの姿はみるみる「腕組みをした狼男」の形をした彫像になった。

そしてガルルはキャッスルドラン射出され、それをＮＥＷキバは見

事に左手でキャッチし、
彫像は剣に変形した。

イクサＳ－Ｍ「なんだありゃ！？もしかししてこれにも・・・あった！」
俺はとっさにイクサベルトを見た。腰にはガルルフエッスルと同型のフェイクフエッスルをとってイクサベルトに入れた。

イクサベルト「ガ・ル・ル・フ・ェ・イ・ク」

「ピリリ・・・ピィーー！ピイイイーピィッ！」

イクサベルトからガルルを呼ぶときと同じ音が鳴ると、ＮＥＷキバの手にあったガルルセイバーがイクサＳ－Ｍの手元に来た。

ＮＥＷキバ「ちょっ、ちょっと翔平！なにするんだよ！」

イクサＳ－Ｍ「悪い、悪い・・・それよりこれ、スゲー切れ味いいな」
そういいながら近くにいたウサギファンガイアをガルルセイバーで切ってみた。

ＮＥＷキバ「あーもーいいよ、さてキバちゃん、そろそろ決めるよ！」

キバットＩＶ世「オーケー正夫、そろそろ祭りの終わりだ！」
ＮＥＷキバはウェイクアップフエッスルを取り出し、キバットＩＶ世に吹かせた。

キバットＩＶ世「ウェイクアップ！」

そういうとキバットⅠＶ世がベルトから外れて、ＮＥＷキバの右足の拘束具を外した。

ＮＥＷキバ「いくぜ！」
そういうとＮＥＷキバは空高く飛び、新・ダークネスムーンブレイクをホースファンガイアに放った。

ホースファンガイア「うあああああ！！」
ホースファンガイアはさらに全身がステンドガラス状になり、粉々になった。そこから光の球のようなものが出てきた。

イクサＳ－Ｍ「へえ、すげえな・・・俺もやってみるか」
俺はナックルフエッスルを取り出し、イクサベルトに入れた。

イクサベルト「イ・ク・サ・ナ・ッ・ク・ル・ラ・イ・ズ・ア・ッ・プ」

イクサＳ－Ｍ「ナックル？ナックルってことは変身に使ったこれだな」
俺はイクサナックルを取って複数のウサギファンガイアに向けた。
イクサナックルから電圧が出てきて、ファンガイア全員に直撃した。

そしてウサギファンガイアたちもホースファンガイアのように全身がステンドガラス状になり、粉々になった。そして、光の球のようなものが出てきた。

イクサＳ－Ｍ「一件落着だな、」
そう言ってベルトを外し、クイーンたちの近くに行った。

翔平「大丈夫か、」

クイーン「は、はいなんとか、」

エリザベス「先輩達やあの人は？」

エリザベスのいってるあの人とは名護さんの事である

正夫「名護さん、大丈夫ですか？」

翔平「Σえっ、知り合いなの！？」

正夫「ま、まあね」

翔平「そうなの。あっ、それとこれお借りしました。」

俺は名護さんにイクサベルトとイクサナックルを返した。

名護「き、み・・・う」

そう言って名護さんはさっきの不意打ちがきいたのか、気絶してしまった。

エリザベス「だ、大丈夫ですか！？」

正夫「大丈夫、気絶しているだけみたい」

翔平「まずどこかで休ませないとな・・一番近いのは・・・」

で鳴海探偵事務所に来た。

翔太郎「どうして内に来るかな？」

翔平「いいじゃないですか、人が困ってるときはお互い様じゃないですか？あっ、そういえば今何時ですか？」

亜樹子「5時ちょっと前よ」
それをきいて俺とフィリップが反応した。

翔平「ちょっとラジオ借りますね、」

フィリップ「いいやダメだ」

翔平「いいじゃん、ラジオ聞いたって」

フィリップ「ダメだ僕も聞きたいものがある」

翔平「お願い」

フィリップ「ダメだ」

翔平「お願い」

フィリップ「ダメだ」

翔平「お願い」

フィリップ「ダメだ」
これって無限ループする？ここら辺で断ち切らないと！

翔平「俺は

フィリップ「僕は

翔平・フィリップ「園咲若菜のヒーリングプリンセスが聞きたいんだ！

・・・えっ」

第４楽章ｗｉｔｈフレンズ・２人のライダー（後書き）

園咲若菜のヒーリングプリンセスでまさかのかぶり。いったいどうなる！？そして名護さんの行方は！？

第5話ーAとの接触／イクサV2爆現（前書き）

オリジナルライダー、始めました（冷やし中華、始めました風に）

第5話ーAとの接触／イクサV2爆現

前回のあらすじ：
NEWキバ「さてキバちゃん、そろそろ決めるよ！」
キバットⅠV世「オーケー正夫、そろそろ祭りの終わりだ！」
キバットⅠV世「ウェイクアップ！」

イクサS－M「へえ、すげえな・・・俺もやってみるか」
イクサベルト「イ・ク・サ・ナ・ッ・ク・ル・ラ・イ・ズ・ア・ッ・プ」

翔平「ちょっとラジオ借りますね、」
フィリップ「いいやダメだ」
翔平「いいじゃん、ラジオ聞いたって」
フィリップ「ダメだ僕も聞きたいものがある」
翔平「お願い」
フィリップ「ダメだ」

翔平「お願い」

フィリップ「ダメだ」

翔平「お願い」

フィリップ「ダメだ」

翔平「俺は

フィリップ「僕は

翔平・フィリップ「園崎のヒーリングプリンセスが聞きたいんだ！

・・・えっ」

――そして――

ラジオ「さあ、始まりました、園咲若菜の・・ヒーリングプリンセス！今日も元気１２０％でお送りします！」

翔平「待ってました！」

ラジオ「ではまずは、風都ミステリーツアー！今日もたくさんのハガキが届いてます！」

フィリップ「今日はいったいどんな謎が！？」

ラジオ「まず１つ目は、・・・なんと、風都を救う謎のヒーロー、仮面ライダーです！」

フィリップ「仮面ライダー？」

翔平「やったーー！読まれたーーーーー！！」

フィリップ「君がだしたのかい？」

翔平「まあ、聞いてなって！」

ラジオ「なんでも都市伝説の仮面ライダーが存在していたらしいです！町の危機をさっそうと現れて悪をたおすヒーローですか・・・若菜も会ってみたいな♪」

フィリップ「仮面ライダー・・・」

翔太郎「仮面ライダー・・・」

正夫「仮面・・・ライダー・・・」

名護「うっ・・・う」

翔太郎「2人で1人の・・・」

フィリップ「仮面ライダー・・・」

翔太郎・フィリップ「「W！！」」

正夫「町を救う仮面ライダーNEWキバ・・・か」

名護「くっ、う・・ここは」

正夫「あっ、名護さん大丈夫ですか！？」

名護「ま、正夫くん」

翔平「あのー大丈夫ですか？」

名護「き、きみは！」

翔平「あっ、すいません、勝手にあのベルト借りて、何かまずかったですか？」

名護「いっ、いやそのことはいいんだ。ただ、」

翔平「ただ？」

名護「君に素晴らしき青空の会に入って欲しいんだ！」

翔平「はっ、はい！？」

名護「君はイクサに変身し、性能を十分に使いこなした！君にならこの、イクサＶ２を使いこなせるはずだ！」
名護はそういうとイクサベルトとイクサナックルにそっくりなイクサベルトＶ２とイクサナックルＶ２を取り出した。

正夫「名護さん！イクサＶ２は完成していたんですか！」

名護「あっああ、というわけでこれを君に託す！答えは明日カフェ・マル・ダムールできく！」
そう言って名護は去っていった。

――翌日、カフェ・マル・ダムール――

翔平「へえ・・・ここがカフェ・マル・ダムールか」

名護「きみ、ここだ。」

翔平「あっ、どうも」

名護「まずは自己紹介をしよう、俺は名護啓介(なごけいすけ)だ。そしてこちらが」

嶋「嶋護(しままもる)だ。」

翔平「あっ、松風翔平です。」

嶋「名護くんから君の事は聞いている。どたんばでの変身でありながら複数のファンガイアをたおしたと。」

翔平「はあ・・・」

嶋「君に素晴らしき青空の会に入会してもらいたいんだ。」

翔平「あの、素晴らしき青空の会ってなんですか?」

嶋「素晴らしき青空の会というのは私が会長を務めるファンガイアを殲滅するために結成された組織だ。警察や各企業に太いパイプラインを持ち、会員が犯罪を犯した際でも揉み消し得る権力を有している。」

翔平「Σマジすか!?」

嶋「名護くんのようなファンガイアとの直接的な戦闘を行なう「戦士」の他、戦士の武器や兵器の開発、諜報やファンガイアの研究なども行なっている。そして我々は君に青空のかいの戦士になってほしいんだ」

翔平「そういわれても・・・」

渡「僕達からもお願いするよ」

翔平「渡さんに正夫！」
渡さんと正夫が店内に入ってきた。

正夫「お願いだよ翔平、翔平の力が必要なんだ。」

名護「お願いだ」

翔平「・・・分かりました。青空の会に入ります。」

嶋「本当かい！？助かるよ、君のような人材とはなかなか出会えないからね。」

名護「ではよろしく」

翔平「よろしくお願いしｍ

ドカアアアン！！！
外で爆発が起こった。

翔平「なんだ！」

嶋「早速お仕事のようだな」

名護「行くぞ渡くん、正夫くん、翔平くん！」

渡・正夫・翔平「「「「はい！」」」」

外には昨日戦ったファンガイアたちよりもさらにステンドガラス状のキツツキ風のファンガイアがいた。

名護「翔平くん、油断するな。ヤツは普通のファンガイアではない。従来のファンガイアを大きく上回る力を持ったネオファンガイアだ！」

翔平「なるほど、まあ戦うことには変わりはないか！」

俺はＶ２イクサベルトとＶ２イクサナックルをだした。

渡「いくよ、キバット！タツロット！」

正夫「こい、キバちゃん！」

キバットバットＩＩＩ世「キバって、行くぜ！」

タツロット「ドラマチックにいきますよ！」

キバットバットＩＶ世「わーい、祭りだ、祭りだ！」

Ｖ２イクサナックル・イクサナックル「「レ・デ・ィ」」

キバットＩＩＩ世・キバットＩＶ世「「ガブッ！」」

翔平・正夫・名護・渡「「「「変身！」」」」

Ｖ２イクサベルト（Ｖ２イクサナックル）・イクサベルト（イクサナックル）「「フィ・ス・ト・オ・ン」」

キィーン！ヒューン・・・ピロロ・・・キュイッピルルッジャキィーン！！

俺はイクサＶ２・バーストモードに、正夫はＮＥＷキバ・キバフォームに、名護さんはイクサ・ライジングフォームに、そして渡さんはキバ・エンペラーフォームになった。

キツツキネオファンガイア「貴様たちにこの俺がたおせるとでも？」

ＮＥＷキバ「たおせるね」

キバ・エンペラーフォーム「もうあやまちを犯さないためにも！」

ライジングイクサ「ネオファンガイア、その命、神に返しなさい！」

イクサＶ２Ｂ－Ｍ「たおすさ、それが俺の運命なら！」

第６話ーＡとの接触／ライダーの名乗り

前回のあらすじ：
ラジオ「さあ、始まりました、園咲若菜の・・ヒーリングプリンセス！今日も元気１２０％でお送りします！ではまずは、風都ミステリーツアー！今日もたくさんのハガキが届いてます！まず１つ目は、・・・なんと、風都を救う謎のヒーロー、仮面ライダーです！なんでも都市伝説の仮面ライダーが存在していたらしいです！町の危機をさっそうと現れて悪をたおすヒーローですか・・・若菜も会ってみたいな♪」

翔太郎「２人で１人の・・・」

フィリップ「仮面ライダー・・・」

翔太郎・フィリップ「「Ｗ！！」」

名護「君に素晴らしき青空の会に入って欲しいんだ！」

翔平「はっ、はい！？」

名護「君はイクサに変身し、性能を十分に使いこなした！君にならこの、イクサＶ２を使いこなせるはずだ！」

嶋「素晴らしき青空の会というのは私が会長を務めるファンガイアを殲滅するために結成された組織だ。警察や各企業に太いパイプラインを持ち、会員が犯罪を犯した際でも揉み消し得る権力を有している。名護くんのようなファンガイアとの直接的な戦闘を行なう「戦士」の他、戦士の武器や兵器の開発、諜報やファンガイアの研究なども行なっている。そして我々は君に青空のかいの戦士になってほしいんだ」

渡「いくよ、キバット！タツロット！」

正夫「こい、キバちゃん！」

キバットバットＩＩＩ世「キバって、行くぜ！」

タツロット「ドラマチックにいきますよ！」

キバットバットＩＶ世「わーい、祭りだ、祭りだ！」

Ｖ２イクサナックル・イクサナックル「「レ・デ・ィ」」

キバットＩＩＩ世・キバットＩＶ世「「ガブッ！」」

翔平・正夫・名護・渡「「「「変身！」」」」

Ｖ２イクサベルト（Ｖ２イクサナックル）・イクサベルト（イクサナックル）「「フィ・ス・ト・オ・ン」」

キツツキネオファンガイア「貴様たちにこの俺がたおせるとでも？」

ＮＥＷキバ「たおせるね」

キバ・エンペラーフォーム「もうあやまちを犯さないためにも！」

ライジングイクサ「ネオファンガイア、その命、神に返しなさい！」

イクサＶ２Ｂ－Ｍ「たおすさ、それが俺の運命ならば！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

キバ・エンペラー「はっ！」

ＮＥＷキバ「やっ！」

キツツキネオファンガイア「きかない！」

ＮＥＷキバ「くっ、きかない、やっぱり３人呼んでドガバキに・・・」

キバットＩＶ世「ダメだ正夫！そいつは危険すぎる！下手したら・・・」

イクサＶ２Ｂ－Ｍ「よっと」

俺はイクサカリバー・ガンモード乱射した。しかし効くはずもなく、キツツキネオファンガイアが突進してきた。

イクサＶ２Ｂ－Ｍ「そういう時はこいつだな！」

俺はすばやくイクサカリバー・ガンモードをカリバーモードに変形させて、キツツキネオファンガイアをついた。

キツツキネオファンガイア「くっ、人間ごときがーーー！」

キツツキネオファンガイアの体からステンドガラス状の針がでてき、俺、ライジングイクサ、ＮＥＷキバ、キバ・エンペラーフォームに命中した。

イクサＶ２「痛、やってくれるな」

ライジングイクサ「だがこの状況では我々の勝ちも同然だ」

キツツキネオファンガイア「おっと、これを見てもそういえるかな？」

キツツキネオファンガイアの背後に無数のサバトが現れ、それがひとつに合わさり、無数のサバトがライオンファンガイア（ルーク）になった。

キバ・エンペラー「アイツは、ルーク！」

ＮＥＷキバ「けどこっちは４人、大丈夫だ！」

キツツキネオファンガイア「そういうと思ったぜ。お前達、出てきな」

キツツキネオファンガイアの言葉で３体のハゲタカを思わせるファンガイアが現れた。

名護「ネオファンガイアに元・チェックメイトフォーのルーク、そして普通のファンガイアが三体か。」

この状況、一体でも強いネオファンガイアと、みんながおびえるライオンのファンガイア、そしてザコ3体か。ざこはどうにかなっても、後の二体がダメかもな。

そんな絶体絶命な状況の中、俺が最初に見た仮面ライダーが現れた。

フィリップ「翔太郎、ヤツはドーパントとは違うみたいだ、」

翔太郎「だが敵であるここには変わりはねえだろ。」

サイクロンメモリ（緑）「Ｃｙｃｌｏｎｅ！」

ジョーカーメモリ（黒）「Ｊｏｋｅｒ！」

翔太郎・フィリップ「「変身！」」

ダブルドライバー「Ｃｙｃｌｏｎｅ－Ｊｏｋｅｒ！」

「ジャジャーンジャジャーンチャララン！（ピロリロピロリロ…）」（サイクロン変身音＆発光）

「（ジャギィーン）バンバンバン！！」（ジョーカー変身音＆発光）

キツツキネオファンガイア「なんだお前は？」

Ｗ－ＣＪ「「仮面ライダー・・・仮面ライダーＷ！！」」

キツツキネオファンガイア「ほう・・・」

ライオンファンガイア「ゲームの始まりだ・・・」

ハゲタカファンガイア×3「「「ひゃーはっはっはっはっはっはっ！！！」」」

第7楽章ー序章・仮面ライダー

前回のあらすじ：
NEWキバ「くっ、きかない、やっぱり3人呼んでドガバキに・・・」

キバットⅣ世「ダメだ正夫！そいつは危険すぎる！下手したら・・・」

イクサV2「痛、やってくれるな」

ライジングイクサ「だがこの状況では我々の勝ちも同然だ」

キツツキネオファンガイア「おっと、これを見てもそういえるかな？」
キツツキネオファンガイアの背後に無数のサバトが現れ、それがひとつに合わさり、無数のサバトがライオンファンガイア（ルーク）になった。

キバ・エンペラー「アイツは、ルーク！」

名護「ネオファンガイアに元・チェックメイトフォーのルーク、そして普通のファンガイアが三体か。」

Ｗ－ＣＪ「翔太郎、ヤツはドーパントとは違うみたいだ、」「だが敵であるここには変わりはねえだろ。」

キツツキネオファンガイア「なんだお前は？」

Ｗ－ＣＪ「「仮面ライダー・・・仮面ライダーＷ！！」」

キツツキネオファンガイア「ほう・・・」

ライオンファンガイア「ゲームの始まりだ・・・」

ハゲタカファンガイア×３「「「ひゃーはっはっはっはっはっ！！！」」」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ハゲタカファンガイア１「おらよ！」

Ｗ－ＣＪ「接近戦か、それならこれだね」

メタルメモリ「Ｍｅｔａｌ！」

ダブルドライバー「Ｃｙｃｌｏｎｅ－Ｍｅｔａｌ！」

「ジャジャーンジャジャーンチャララン！（ピロリロピロリロ…）」（サイクロン変身音&発光）

「ジャジャジャン！（カァン！）ジャジャジャジャン！！」（メタル変身音&発光）

ハゲタカファンガイア「なんだこいつ！色が変わった！」

Ｗ－ＣＭ「こいつで決めるぜ」

メタルシャフト「Ｍｅｔａｌ！マキシマムドライブ！」

Ｗ－ＣＭ「メタルツイスター！」

ハゲタカファンガイアはドーパントではないため、粉々に砕けた。

イクサＶ２「やってるね」

Ｗ－ＣＭがハゲタカファンガイアを倒しているのを見届けていた中、俺はなぜかルークことライオンファンガイアと戦っていた。名護さんは俺に、「君がチェックメイトフォーのルーク相手にどこまでできるか見たい」っていって俺を戦わせている。

ライオンファンガイア「おらあ！」

ヤツの攻撃力は他のファンガイアとは次元が違う。まともに受けていたら間違いなくやられる。弱点はないのか！？

イクサＶ２「くそ！」

ライオンファンガイア「ぐわあああ！」

俺はイクサカリバー・カリバーモードでルークの右肩を攻撃した。思いのほか効いたらしく、地面に倒れてはいつくばっている。

イクサＶ２「弱点はそこか！」

――一方、ＮＥＷキバは――

キバットＩＶ世「ドッガハンマー！」

キバットＩＶ世はドッガハンマーを呼び寄せ、ＮＥＷキバはそれを両手で見事にキャッチ、ＮＥＷキバ・ドッガフォームになった。

ＮＥＷキバ「そりゃ！」

ハゲタカファンガイア「うわっ！」

ドッガハンマーの攻撃力が高いのかハゲタカファンガイアは吹き飛ばされた。

イクサＶ２「アア、あれ使えそうだな」

ルークの弱点の右肩を攻撃するのにあのハンマーは最適だ。そうだ、昨日の剣みたいに雅の持っていたのと形の似たやつがあるはずだ・・・あった！！

イクサＶ２「正夫、それ借りるぞ！」

ＮＥＷキバ「えっ？」

イクサベルトＶ２「ド・ッ・ガ・フ・ェ・イ・ク」

グオオン・・・グオオン・・・グオン！

イクサＶ２「よしっ！そりゃ！」

ライオンファンガイア「ぐああ！」

イクサＶ２「痛恨の一撃だな、もういっちょ！」

ライオンファンガイア「ぐわっ！」

イクサＶ２「とどめはこいつだ！」

イクサベルトＶ２「イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・ア・ッ・プ」

ピロリロピロリッピロリロピロリッ

イクサＶ２「そりゃ！」

ライオンファンガイア「うわあああああ！！！」

ライオンファンガイア（ルーク）は全身がステンドガラス状になり、粉々になった。

ライジングイクサ「上出来だ、正夫君、こっちも決めるぞ！」

ＮＥＷキバ「はい！」

ライジングイクサはライザーフエッスルを、ＮＥＷキバはウェイクアップフエッスルを取り出した。

イクサベルト「ピロリロピロリッ」

キバットＩＶ世「ウェイクアップ！」

ライジングイクサはハゲタカファンガイアは銃弾を打ち込んだ。しかし力が強かったのか反動で吹き飛ばされた。そしてそのままその

反動をいかしてとび蹴りを、ＮＥＷキバは新・ダークネスムーンブレイクを放った。

ハゲタカファンガイア×２「「「ぐわああ！」」」

ハゲタカファンガイア２体もまた全身がステンドガラス状になり、粉々になった。

イクサＶ２「残るはあの鳥ヤローか、」

一方キバエンペラーフォームとキツツキネオファンガイアは・・・

タツロット「ウェイクアップ・フィーバー！」

キバ・エンペラーフォームはエンペラームーンブレイクを放った。キツツキネオファンガイアは普通のファンガイア以上に粉々になった。

ライジングイクサ「やったな、渡くん！」

そしてみんな変身を解除した。

名護「君達はいったい何者だ？」

翔太郎「あ、俺たちはただの私立探偵だ」

フィリップ「・・・仮面ライダーだけどね」

名護「まあそれより翔平くん。君はすでに立派な戦士だ。これから分からないことならなんでも教える。」

渡「改めてよろしくね、翔平くん。」

正夫「よろしく、翔平！」

翔平「こちらこそよろしく！」

第8話一目覚めし魂（前書き）

アギト編です

第8話一目覚めし魂

前回のあらすじ：

Ｗ－ＣＪ「接近戦か、それならこれだね」

メタルメモリ「Ｍｅｔａｌ！」

ダブルドライバー「Ｃｙｃｌｏｎｅ－Ｍｅｔａｌ！」

メタルシャフト「Ｍｅｔａｌ！マキシマムドライブ！」

Ｗ－ＣＭ「メタルツイスター！」

キバットＩＶ世「ドッガハンマー！」

イクサＶ２「アア、あれ使えそうだな、正夫、それ借りるぞ！」

ＮＥＷキバ「えっ？」

イクサベルトＶ２「ド・ッ・ガ・フ・ェ・イ・ク」

グオオン・・・グオオン・・・グオン！

イクサＶ２「よしっ！そりゃ！」

ライオンファンガイア「ぐああ！」

イクサＶ２「痛恨の一撃だな、もういっちょ！」

ライオンファンガイア「ぐわっ！」

イクサＶ２「とどめはこいつだ！」

イクサベルトＶ２「イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・ア・ッ・プ」

ライジングイクサ「上出来だ、正夫君、こっちも決めるぞ！」

ＮＥＷキバ「はい！」

イクサベルト「ピロリロピロリッ」

キバットＩＶ世「ウェイクアップ！」

タツロット「ウェイクアップ・フィーバー！」

名護「君達はいったい何者だ？」

翔太郎「あ、俺たちはただの私立探偵だ」

フィリップ「・・・仮面ライダーだけどね」

名護「まあそれより翔平くん。君はすでに立派な戦士だ。これから分からないことならなんでも教える。」

渡「改めてよろしくね、翔平くん。」

正夫「よろしく、翔平！」

翔平「こちらこそよろしく！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

翔平「ああ、腹減った、なんかうまいもの食いたいな、」

――時刻８時――

腹の減った俺は自分の鼻を頼りにおいしそうな食べ物の売っている店を探した。

翔平「！！この匂い！」

俺は足を止めた。店の名前は『Ｒｅｓｔａｕｒａｎｔ　ＡＧＩＴＯ』。

カランカラン

翔一「いらっしゃいませ！こちらの席をどうぞ！」

翔平「どうも」

俺はメニューを見た。・・・翔一スペシャル？なんだそりゃ、たのんでみるか。

翔平「すいません。この翔一スペシャルをひとつ、」

翔一「はい、かしこまりました。」

そして、料理がキタ。今までに見たことのない料理。よく言えば創作料理、悪く言えば軽いゲテモノ料理だ。

翔平「い、いただきます」

俺は一口その食べ物を口の中に運んだ。

翔平「・・・！うめええ～！」

俺はもう一口、もう一口とその食べ物を口の中に運んだ。そしてきずいた時には皿から食べ物がなくなっていた。

翔平「ごちそさまでした、」

――時刻９時――

目の前にナメクジのような怪人が現れた。

翔平「お仕事の時間か、行くぜ」

イクサナックルＶ２「レ・デ・ィ」

翔平「変、身！」

イクサナックルＶ２（イクサベルトＶ２）「フィ・ス・ト・オ・ン」

キィーン！ヒューン・・・ピロロ・・・キュイッピルルッジャキィーン！！

イクサＶ２　Ｓ－Ｍ「さーて行きますか！」

俺はセーブモードからバーストモードに変わった。

イクサＶ２　Ｂ－Ｍ「そりゃ！」

俺はイクサカリバー・カリバーモードで怪人を切った。

怪人「ぐわあ！お前、アギトじゃない。でもお前アギトの力を！」

イクサＶ２「あん、アギト？」

――そして『Ｒｅｓｔａｕｒａｎｔ　ＡＧＩＴＯ』では――

翔一「来た！」

翔一は何かを感じ取ったのか、店を飛び出し、愛車のホンダＶＴＲ１０００Ｆ・ＦＩＲＥＳＴＯＲＭに乗って店を後にした。

――そしてイクサＶ２と怪人は――

イクサＶ２「何だこいつ？ドーパントでもファンガイアでもネオファンガイアでもないっぽい！？」

謎の怪人「アギト・・・抹殺・・・」
謎の怪人は左手で右手の甲を“闇の力”の文字の形に辿るという、殺しのサインを切った。そして怪人の天使の輪のような円盤状の発光体が頭上に出現して、そこから槍のようなものが出てきた。

謎の怪人「フン！」
怪人は槍をベルトになげてきた。その生でベルトは壊れ、変身が解除された。

翔平「ぐわっ！やべえ、嶋さんや名護さんになんて言おう、」
怪人は俺に槍を投げてきた。しかしそのとき俺の前『ＡＧＩＴΩ』の店員さんが乗ったホンダＶＴＲ１０００Ｆ・ＦＩＲＥＳＴＯＲＭが槍をはじいた。

翔一「大丈夫ですか！」

翔平「あなたは！」

翔一「あいつらは！俺と湯川さんと葦原さんで全員倒したはずなのに！」

怪人「アギト・・・抹殺！」
そういうと怪人は翔一さんにも槍を投げた。

翔平「危ない！」
今度は俺が翔一さんを助けた。

翔一「ありがとう、それより・・・」
翔一は何かのポーズをとり、「キィィィィィィィィ……ン！」
という音と共にベルト・オルタリングが現れた。
ヴォォォォン……ヴォォォォン……ヴォォォォン……↑力を
溜めていそうな音
翔一「変身！」
ビューーーン！フォーン！↑変身音
翔一さんの姿はたちまち仮面ライダーアギト・グランドフォームに
変わった。
アギト・Ｇ－Ｆ「フン！」
謎の怪人「ア・・・ギ・・・ト・・・滅殺！」
謎の怪人は左手で右手の甲を“闇の力”の文字の形に辿るという、
殺しのサインを切った。そして怪人の天使の輪のような円盤状の発
光体が頭上に出現して、そこから槍が出てきた。
アギト・Ｇ－Ｆ「！」
アギトはベルトの左についてるスイッチのようなものを押してベル
トから長槍・ストームハルバードが出てきた。それと反応したのか、
胸の部分と左腕がが青色に変わり、アギトはグランドフォームから
ストームフォームに変わった。
アギト・Ｓ－Ｆ「ハッ！」

怪人「うっ！」

アギト・Ｓ－Ｆ「そろそろいくぞ、」

アギト・ストームフォームはハルバードスピンを発動し、怪人にぶつけた。

怪人「ぐわああ！」

怪人はアギト・ストームフォームの技を受けて爆死した。爆死する直前に武器を出すとき同様天使の輪のような円盤状の発光体が頭上に出現した。

翔一「ふう・・・」

翔一さんはアギトへの変身を解除した。

翔平「ほえー・・・（新たなる仮面ライダー・・・、ね）」

あっ、そういえばイクサＶ２どうしよっかな～、壊しちゃったよ。

あれメンテするのにどれだけ時間かかるんだろうな、

第9話ーシュラウドの森・ペガサスの記憶（前書き）

新オリジナルライダー登場

第9話ーシュラウドの森・ペガサスの記憶

前回のあらすじ：
翔平「ああ、腹減った、なんかうまいもの食いたいな、！！この匂い！」

店名『Ｒｅｓｔａｕｒａｎｔ　ＡＧＩＴＯ』。

カランカラン

翔一「いらっしゃいませ！こちらの席をどうぞ！」

翔平「どうも」

翔平「すいません。この翔一スペシャルをひとつ、」

翔一「はい、かしこまりました。」

翔平「お仕事の時間か、行くぜ」

イクサナックルＶ２「レ・デ・ィ」

翔平「変、身！」

イクサナックルＶ２（イクサベルトＶ２）「フィ・ス・ト・オ・ン」

キィーン！ヒューン・・・ピロロ・・・キュイッピルルッジャキィ

ーン！！

イクサＶ２　Ｓ－Ｍ「さーて行きますか！」
俺はセーブモードからバーストモードに変わった。

イクサＶ２　Ｂ－Ｍ「そりゃ！」
俺はイクサカリバー・カリバーモードで怪人を切った。

怪人「ぐわあ！お前、アギトじゃない。でもお前アギトの力を！」

イクサＶ２「あん、アギト？」

謎の怪人「アギト・・・抹殺・・・」
謎の怪人は左手で右手の甲を“闇の力”の文字の形に辿るという、殺しのサインを切った。そして怪人の天使の輪のような円盤状の発光体が頭上に出現して、そこから槍のようなものが出てきた。

謎の怪人「フン！」
怪人は槍をベルトになげてきた。その生でベルトは壊れ、変身が解除された。

翔平「ぐわっ！やべえ、嶋さんや名護さんになんて言おう、」

キィィィィィィィィ……ン！

ヴォォォォン……ヴォォォォン……ヴォォォォン……↑力を

溜めていそうな音

翔一「変身！」

ビューーーン！フォーン！↑変身音

謎の怪人「ア・・・ギ・・・ト・・・滅殺！」

アギト・Ｓ－Ｆ「そろそろいくぞ、」

怪人「ぐわああ！」

翔一「ふう・・・」

翔平「ほえー・・・（新たなる仮面ライダー・・・、ね）」

＊＊＊＊＊＊＊＊

あっ、そういえばイクサＶ２どうしよっかな～、壊しちゃったよ。
あれメンテするのにどれだけ時間かかるんだろうな、

――次の日、カフェ・マル・ダムール――

翔平「すいません！」

俺は嶋さんにめいいっぱい謝っていた。

翔平「せっかくいただいたイクサV2を壊してしまってすいません！」

嶋「いいよ、それより敵はファンガイアでもネオファンガイアでも、そしてガイアメモリで変身したドーパントでもなかったそうだね。」

翔平「はい、敵はステンドガラス状ではありませんでしたし、爆発してガイアメモリが排出されたわけでもありません。」

嶋「それはアンノウンだ。」

翔平「アンノウン！？」

嶋「ああ、1ヶ月前に全て消滅したと思われていた怪人のことだ。君は超能力の存在を信じているかね？」

翔平「超能力・・・」

嶋「アンノウンたちはその超能力を持つ人間ばかりを襲っていたんだ。最近の調べでは超能力を持つ人間を襲っていた理由は、超能力者達ばかりを襲っていた理由はどうやら超能力者には人間の進化形態、アギトになる可能性があるかららしい。アンノウンが超能力者ばかり襲っていた理由は、アギトに滅ぼされるのを恐怖していたという学説がある。」

翔平「アギト・・・そういえば俺を助けたやつをアギトって言っていましたし、俺の中にアギトの力があるって・・・でも俺は超能力持っていませんし・・・」

嶋「そうか、まあそのことはおいといて君にこれを預けとこう。」
俺はファンガイアハンターを手に入れた▼↑ＲＰＧ風に
嶋「イクサＶ２が直るまでこれを使って戦っていてくれ、」
そして俺はカフェ・マル・ダムールを後にした。
しかし、その直後・・・
モールファンガイア「グオオオオ！！」
野生のモールファンガイアが現れた▼
翔平「くっ、ならこいつで！」
俺はファンガイアハンターを使って攻撃した。しかし、モールファンガイアは地中にもぐり、隠れてしまった。
翔平「あれっ？あいつどこいって・・・
フィリップ「松風翔平」
翔平「フィリップに翔太郎さん？」
翔太郎「さっきの怪物どこ行った？まあそれより行くぜフィリップ」
フィリップ「ああ翔太郎、」
サイクロンメモリ「Ｃｙｃｌｏｎｅ！」
ジョーカーメモリ「Ｊｏｋｅｒ！」

翔太郎・フィリップ「「変身！」」

ダブルドライバー「Ｃｙｃｌｏｎｅ－Ｊｏｋｅｒ！」

「ジャジャーンジャジャーンチャララン！（ピロリロピロリロ…）」（サイクロン変身音＆発光）

「（ジャギィーン）バンバンバン！！」（ジョーカー変身音＆発光）

Ｗ－ＣＪ「さて、アイツはどこだ？」

Ｗがモールファンガイアを探し始めた。俺もファンガイアハンターを前方に向け、用意していた。

モールファンガイア「フン！」

Ｗ－ＣＪ「うわあ！」

モールファンガイアが不規則に地中に出てくるせいでファンガイアハンターは使えず、Ｗも防戦一方。

翔平「うわっ！」

今度は俺に攻撃を仕掛けてきた・・・？ヤツは俺を地面の中に引きずり込んだ。そしてきずいたときにはモールファンガイアはいなくなっていて、俺は霧に包まれた森の中にいた。そこには顔に包帯を巻いた女が立っていた。

翔平「あなたは？」

シュラウド「私はシュラウド」

翔平「シュラウド？」

シュラウド「あなたは松風翔平ね」

翔平「あっ、ああ」

シュラウド「あなたにこれを預ける」
目の前にはロストドライバーとペガサスのメモリが合った。
俺はロストドライバーとペガサスメモリを手に取った。

シュラウド「これを使って戦いなさい」

翔平「ちょっ、待って！」
目が覚めた。夢・・・だったのか？

Ｗ－ＣＪ「うわあああ！」
Ｗがモールドーパントの地中からの攻撃に押されている。

翔平「ここのままじゃ負ける・・・！」
俺は自分の手にロストドライバーとペガサスメモリがあることに気付いた。

翔平「夢・・・じゃなかった？・・・・・・・今はこれを使うしかないか！」

俺はロストドライバーをつけた。

Ｗ－ＣＪ「あれは、ロストドライバー？なぜ君が！？」「あれはおやっさんが使っていたのと同じベルト！」

ペガサスメモリ「Ｐｅｇａｓｕｓ！」

翔平「変身！・・・えーとガイアメモリをこのドライバーに入れて・・・」

ロストドライバー「Ｐｅｇａｓｕｓ！」

俺の姿はみるみる天馬を思わせる姿になった。

ペガサス「仮面ライダー・・・ペガサス！」

モールファンガイア「それがどうした・・・よっ！！」

モールファンガイアが攻撃してきた。

ペガサス「よっ！」

モールファンガイア「なにっ！」

ペガサス「へえ、空飛べるんだ。そりゃそうだよな、天馬だもん、」

モールファンガイアは再び地中にもぐった。俺はペガサスマグナム（トリガーマグナムの白バージョン）を取り出した。

ズカンズカンズカン！

モールファンガイア「うわあ！」

ペガサス「あれっ、当たったの！？」

Ｗ－ＣＪ「よし、マキシマムドライブだ！」

ペガサス「ん？ああ」

ダブルドライバー「Ｊｏｋｅｒ！マキシマムドライブ！」

ロストドライバー「Ｐｅｇａｓｕｓ！マキシマムドライブ！」
Ｗはジョーカーエクストリームの準備を、俺はペガサスマグナムから円錐状の白い光を放ってモールドーパントをポイントした（※デルタのルシファーズハンマーを想像してください）。

Ｗ－ＣＪ「ジョーカーエクストリーム！」

ペガサス「はあ！！！」

２人のライダーのマキシマムドライブをうけたモールファンガイアは全身がステンドガラス状になり、粉々になった。

第１０話－Ｍに負けるな／天国のカジノ（前書き）

第１０話・・・もうここまで来たか

第１０話ーＭに負けるな／天国のカジノ

前回のあらすじ：

嶋「敵はファンガイアでもネオファンガイアでも、そしてガイアメモリで変身したドーパントでもなかったそうだね。」

翔平「はい、敵はステンドガラス状ではありませんでしたし、爆発してガイアメモリが排出されたわけでもありません。」

嶋「それはアンノウンだ。」

翔平「アンノウン！？」

嶋「ああ、１ヶ月前に全て消滅したと思われていた怪人のことだ。君は超能力の存在を信じているかね？」

翔平「超能力・・・」

翔平「あれっ？あいつどこいって・・・

フィリップ「松風翔平」

翔平「フィリップに翔太郎さん？」

翔太郎「さっきの怪物どこ行った？まあそれより行くぜフィリップ」

フィリップ「ああ翔太郎、」

サイクロンメモリ「Ｃｙｃｌｏｎｅ！」

ジョーカーメモリ「Ｊｏｋｅｒ！」

翔太郎・フィリップ「「変身！」」

ダブルドライバー「Ｃｙｃｌｏｎｅ＿Ｊｏｋｅｒ！」

「ジャジャーンジャジャーンチャララン！（ピロリロピロリロ…）」（サイクロン変身音＆発光）

「（ジャギィーン）バンバンバン！！」（ジョーカー変身音＆発光）

翔平「あなたは？」

シュラウド「私はシュラウド」

翔平「シュラウド？」

シュラウド「あなたは松風翔平ね」

翔平「あっ、ああ」

シュラウド「あなたにこれを預ける。これを使って戦いなさい」

ペガサスメモリ「Ｐｅｇａｓｕｓ！」

翔平「変身！・・・えーとガイアメモリをこのドライバーに入れて・・・」

ロストドライバー「Ｐｅｇａｓｕｓ！」

俺の姿はみるみる天馬を思わせる姿になった。

ペガサス「仮面ライダー・・・ペガサス！」

ダブルドライバー「Ｊｏｋｅｒ！マキシマムドライブ！」

ロストドライバー「Ｐｅｇａｓｕｓ！マキシマムドライブ！」

Ｗはジョーカーエクストリームの準備を、俺はペガサスマグナムから円錐状の白い光を放ってモールドーパントをポイントした（※デルタのルシファーズハンマーを想像してください）。

Ｗ－ＣＪ「ジョーカーエクストリーム！」

ペガサス「はあ！！！」

２人のライダーのマキシマムドライブをうけたモールファンガイアは全身がステンドガラス状になり、粉々になった。

＊＊＊＊＊＊

２人のライダーのマキシマムドライブをうけたモールファンガイア

は全身がステンドガラス状になり、粉々になった。俺とWは変身を解除した。

翔太郎「なあ、何でお前、ロストドライバーとガイアメモリを？」

フィリップ「誰からもらったんだい？」

俺は答えようとした。しかし、自分がなぜドライバーとメモリを持っているのか思い出せない。

翔平「分からない、気絶して目が覚めたらいつの間にかあったし」

翔太郎「そうか・・・」

――現在――

名護「イクササーイズ！俺は正しい！ついてきなさーい、迎撃開始！」

俺はなぜかイクササイズをしている。

名護「腕ふりなさい　ふりなさい　早くしなさい　飛びなさい
腕ふりなさい　ふりなさい　早くしなさい　飛びなさい
腕ふりなさい　ふりなさい　早くしなさい　飛びなさい
腕ふりなさい　ふりなさい　早くしなさい　飛びなさい！」

翔平「ふう、やっと終わった！」

正夫「けっこう・・・ハードだよな」

フィリップ「はあ・・・はあ・・・なぜ僕まで・・・」

翔平「えーと、そろそろラジオ始まるな」
俺は持参してきたラジオを『園咲若菜のヒーリングプリンセス』のやってるにあわせた。

ラジオ「園咲若菜の、ヒーリングプリンセス！今日も元気１２０％でお送りします！」

翔平「これだけが心の癒しだよ・・・」

ラジオ「最初のコーナーは・・・風都ミステリーツアー！今回いただいたおはがきは・・・なんと、風都にある謎のカジノ、ミリオンコロッセオです！風都のどこかにある謎のカジノ、一体どこにあるんでしょうか」

フィリップ「ミリオンコロッセオか・・・」

――そして鳴海探偵事務所に向かった――

フィリップ「ただいま」

翔平「お邪魔しマース」

「何とかしてよ、翔ちゃん！」

フィリップ「どうしたんだい、翔太郎？」

翔太郎「ああ、実はかくかくしかじか」

フィリップ「なるほど、ミリオンコロッセオに・・・」
鳴海探偵事務所に依頼が来た。どうやら自分の娘がミリオンコロッセオに行ってから性格ががらりと変わったらしい。娘を何とかしてくれっ、てことだな。

翔太郎「ミリオンコロッセオね、まあまずその娘を尾行するか、」
翔太郎さんと亜樹子さんは出かけていった。

翔平「俺もなんかやろうかな、フィリップはなんかしねーの？」

フィリップ「僕は知らせを元に検索するまでさ、」

翔平「ふーん、じゃ俺も捜査ですっかな、暇つぶしに」
俺は学校に向かった。何故かって？仮面ライダーフォーゼでおなじみのＪＫ（ジェイク）にミリオンコロッセオのことについて聞くためさ！

翔平「よージェイク」

ジェイク「翔平センパイ！どうしたんですか、こんなところに？」

翔平「情報が欲しいんだ、ミリオンコロッセオについて、」
そういうと俺は１０００円札を出してジェイクに渡した。そしてジェイクはあたりをキョロキョロしてから行った。

ジェイク「まず、ミリオンコロッセオについて説明しよう。ミリオンコロッセオって言うのは、風都にある大きなカジノのことだ。このカジノにいったものは性格が激変し、金に目がなくなってしまうんだ。」

翔平「それ以外には？」

ジェイク「そこまでは・・・ちょっと・・・なー」
俺はさらに１０００円札を出してジェイクに渡した。そしてジェイクはまたあたりをキョロキョロしてから行った。

ジェイク「ひゅー・・・いや、どーもそのカジノを開いている主催者とカジノの勝負をしたヤツは金を失って、意識がなくなるらしいんだよ、」

翔平「そこへの生き方は？」

ジェイク「色々あるが・・・一番有力なのはバスらしい。」

翔平「ふーんなるほどな、ありがとな」
そして俺は学校を後にした。

ジェイク「ちょっ、これだけ！？もっと聞いてよ！そして金を、くれっ♪」

生徒「ジェイク！」

ジェイク「何だよ、同情するなら金をくれ！」

生徒「やるよ、それより保健室の先生の攻略法、教えて！」

ジェイク「まず、体調が悪いと保健室に迎え、それから・・・

――――――場所は変わり風都バス前――――――

翔平「ここかな？あっ、翔太郎さん」

俺は一人の女を尾行していた翔太郎さんと亜樹子さんを見た。

翔太郎（わっ、お前、しっ！）

亜樹子「アーッ！見失った！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

翔平「ごめんなさい」

翔太郎「もういいよ、それより情報をつかんだって本当か？」

翔平「はい、ミリオンコロッセオはどうやら風都バスで行くらしいんです。、翔太郎さんが追っていた人が消えた直後にバスが通ったのが見えたことを考えると、ほぼ１００パーセントでしょう、俺は明日、今日と同じ時間帯にここ来てみます」

――――――そして次の日――――――

翔平「ふーん、この時間帯かな」

そしてさらに人が来た。中に翔太郎さんが追っていた人もいた。

翔平「あっ、バスキタ。」

そしてバスが来た。

乗ったはいいけど、どこ行くんだ？

バスはトンネルで止まった。そしてみんな降りた。・・・降りた？
ここが、ミリオンコロッセオ！？

第１０話ーＭに負けるな／天国のカジノ（後書き）

今回のモトネタ：仮面ライダーＷ　９月２０日放送　第３話

Ｍに手を出すな　／　天国への行き方

第１１話ーＭに負けるな／金の表裏

前回のあらすじ：
名護「イクササーイズ！俺は正しい！ついてきなさーい、迎撃開始！腕ふりなさい　ふりなさい　早くしなさい　飛びなさい！」

ラジオ「園咲若菜の、ヒーリングプリンセス！今日も元気１２０％でお送りします！」

翔平「これだけが心の癒しだよ・・・」

ラジオ「最初のコーナーは・・・風都ミステリーツアー！今回いただいたおはがきは・・・なんと、風都にある謎のカジノ、ミリオンコロッセオです！風都のどこかにある謎のカジノ、一体どこにあるんでしょうか」

翔平「情報が欲しいんだ、ミリオンコロッセオについて、」

ジェイク「まず、ミリオンコロッセオについて説明しよう。ミリオンコロッセオって言うのは、風都にある大きなカジノのことだ。このカジノにいったものは性格が激変し、金に目がなくなってしまうんだ。」

翔平「ごめんなさい」

翔太郎「もういいよ、それより情報をつかんだって本当か？」

翔平「はい、ミリオンコロッセオはどうやら風都バスで行くらしいんです。、翔太郎さんが追っていた人が消えた直後にバスが通ったのが見えたことを考えると、ほぼ１００パーセントでしょう、俺は明日、今日と同じ時間帯にここ来てみます」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

翔平「ここが、ミリオンコロッセオ。俺も何かしようかな」

ジャララララララララ

翔平「ルーレットか・・・」

賭け人Ａ「黒の１９！」

賭け人Ｂ「赤の１２！」

翔平（いや・・・黒の１９だな・・・）

玉は俺の予想通り、黒の１９に入った。

賭け人Ｂ「くそー、もうあとがねえー！」

翔平「それ、俺が引き受けていい？」

賭け人Ｂ「はあ？」

翔平「もしだめだったら金返しますか・・・２倍で」

そういうと賭け人Ｂは席を譲ってくれた。

賭け人Ａ「ガキが勝てるとでも？」

翔平「それよりさっさと始めようぜ」

ルーレットは回り始めた。

翔平「・・・・・・赤の２４だ、赤の２４に全額かけよう」

賭け人Ａ「フン、たいした自身だな・・・黒の２１！」

ルーレットが止まる・・・玉が入ったのは・・・

――――赤の２４――――

賭け人Ａ「何！？」

翔平「やり♪」

？？？「みなさんようこそ。夢のカジノ、ミリオンコロッセオへ、

私がオーナーの加賀泰造（かがたいぞう）です。」

翔平「ふーん、アイツがオーナーか、」

加賀「私への挑戦権を獲得したものが、また、現れた。」

フィリップ「なるほど、彼がマネーのメモリを持つものか。」

翔平「Σフィリップ！いたの？つーか、マネーのメモリってアイツもドーパント？」

フィリップ「ああ、昨日ヤツと出くわしてねWに変身して戦ったんだ。あっ、ちなみに翔太郎や亜樹ちゃんも来ているから。」

加賀「その勇気あるチャレンジャーの名前は・・・和泉優子（いずみ ゆうこ）！」

和泉優子の挑戦が始まった。まあ、原作どおり和泉優子は負け、加賀はマネーメモリを使ってマネードーパントに変身したけど。

和泉優子「待って、今度こそ私につきが来る！」

マネードーパント「負け犬のクズはみんなそういう、確か両親の店が破産寸前・・・だったかな？」

こうして、和泉優子の意識はコイン中に、

マネードーパント「ふふふ・・・ふはははは・・ぶほ！！

亜樹子さんのスリッパが加賀に炸裂。

亜樹子「アンタ、人を何だと思っているのよ！」

――――――以下省略――――――

翔平「で、何で俺なのかな！？」

翔太郎「悪い、フィリップが動かなくて」

フィリップ「・・・家族・・・家族・・・家族・・・」

翔平「分かりました。まあ、とりあえず、黒の１６あたりで、」

加賀「なら私は赤の２３だ」

ルーレットは止まり、黒の１６に玉は入った。

翔平「やり、後一回勝てばＯＫだな」

加賀「くっ、このままだと・・・！」

マネーメモリ「ＭＯＮＥＹ！」

翔平「うわっ、変身した」

翔太郎「フィリップ、行くぞ」

フィリップ「・・・」

翔平「家族の事か」

翔平「家族のことは今考えるな・・・お前には翔太郎さんみたいなー、・・・仲間がいるだろ」

フィリップ「！」

翔平「まあいいさ、さて行きますか」

ペガサスメモリ「Ｐｅｇａｓｕｓ！」

翔平「変・・・身！」

ロストドライバー「Ｐｅｇａｓｕｓ！」

ペガサス「仮面ライダーペガサス、行くぜ！」

そして俺は逃げていったマネードーパントを飛んで追いかけた。

フィリップ「翔太郎・・・」

翔太郎「なんだ？」

フィリップ「いこう」

サイクロンメモリ「Ｃｙｃｌｏｎｅ！」

翔太郎「ああ」

ジョーカーメモリ「Ｊｏｋｅｒ！」

フィリップ・翔太郎「「変身！」」

ダブルドライバー「Ｃｙｃｌｏｎｅ－Ｊｏｋｅｒ！」

「ジャジャーンジャジャーンチャララン！（ピロリロピロリロ…）」（サイクロン変身音＆発光）

「（ジャギィーン）バンバンバン！！」（ジョーカー変身音＆発光）

――――　一方マネードーパントは　――――

マネードーパント「はあ・・・はあ・・・疲れた」

ペガサス「めーっけ」

マネードーパント「何！飛ぶのなんかあるか！！」

ペガサス「アリアリ、マジアリ。」

マネードーパント「だが一人で私を倒せるかな」

ペガサス「大丈夫、ちゃーんとお仲間いるから」

マネードーパント「何？」

ブロロロロロロロロ↑ハードボイルダー・スタートダッシュモードが走る音

Ｗ－ＣＪがハードボイルダー・スタートダッシュモードに乗ってやってきた。

Ｗ－ＣＪ「よう、マネーのおっさん」「またせたね」

マネードーパント「マネーのおっさん！？貴様、家族はどうした！！」

Ｗ－ＣＪ「家族・・・大丈夫さ、僕には頼りないけど、・・・家族みたいな人たちがいるから、」

ヒートメモリ「Ｈｅａｔ！」

メタルメモリ「Ｍｅｔａｌ！」

ダブルドライバー「Ｈｅａｔ－Ｍｅｔａｌ！」

ペガサス「よっし、そろそろ決めますか」

Ｗ－ＨＭ「ん？ああ」

メタルシャフト「Ｍｅｔａｌ！マキシマムドライブ！」

鉄棒か、俺にも似たようなの無いかな？あっ、剣あった。おまけにメモリ入れるスペースもあった。

ペガサスブレード「Ｐｅｇａｓｕｓ！マキシマムドライブ！」

Ｗ－ＨＭ「「メタルブランディング！」」

ペガサス「必殺技の名前・・・よしっ！ペガサス・スターダスト！」

マネードーパント「ぐわあああああ！！」

マネーメモリは壊れた。しかし、俺の攻撃はまだ終わっていないので、加賀に当たった。

加賀「ぐわあああああ！！」

ペガサス「あっ・・・・・・・・」

W－HM（ひどいね）

ペガサス「じゃっ♪」

W－HM「おい！」「せめて悪びれたらどうだい！？」

俺はさっそうと飛んで帰った♪

――――――次の日――――――

キンコンカンコン

放送「来週、全学年共通でテストがあります、」

翔平「へえー」

正夫「なんだろう」

放送「このテストは学力ごとにクラスわけをするためのテストです。ちなみに風邪で休んだら、最下級のクラスになります。」

バカ・アホな生徒達「「「「「「「「「「えーーーー！！！」」」」」」」」」」

翔平「はあ！？」

正夫「Σなぜに！」

続く

第１１話－Ｍに負けるな／金の表裏（後書き）

翔平「こおおらあ、作者！なんのつもりだ！！」

正夫「僕、設定では勉強できない設定でしょ！？どうするんだよーーー！」

翔平「いやっ、それはまじめに勉強しろ」

奇跡的な人間「いや～実はさあ、この小説って仮面ライダーやさまざまなアニメが混合・融合した世界って設定でしょ」

正夫「まあ、そうだね」

奇跡的な人間「でも今のところ、仮面ライダーが混合した世界だから・・・」

翔平「だから？」

奇跡的な人間「バカとテストと召喚獣にっ！を混合・融合させるんだ！」

翔平・正夫「はあああああーー！！？？」

奇跡的な人間「と、言うわけで、次回第１２話、ご期待ください！」

翔平「勝手に閉めるなーーー！！！」

第１２話ー バカと観察処分者とＦクラス（前書き）

前回のあとがきの続き：

翔平「でっ、本当に『バカとテストと召喚獣にっ！』が混ざってくるとはな・・・」

奇跡的な人間「いや～にぎやかになるね！」

翔平「逆に怖ーよ！あそこらへんのキャラ、毒物料理作るヤツもいれば、スタンガンで気絶させてグロイ映画見せさせるヤツいるし・・・」

奇跡的な人間「そうかな？」

翔平「お前はいいよな・・・ただ小説を考えて書くだけだから・・・どうせ、俺なんかは・・・半殺しに会うのが関ノ山さ・・・」

奇跡的な人間「ちょっと矢車さんモードオフにして！今回ライダー出てこないんだから（あらすじ以外）！それじゃあ、張り切ってスタート！」

翔平「・・・どうせ俺なんか」

第１２話ーバカと観察処分者とＦクラス

前回のあらすじ：
賭け人Ａ「黒の１９！」
賭け人Ｂ「赤の１２！」
賭け人Ａ「ガキが勝てるとでも？」
翔平「それよりさっさと始めようぜ
翔平「・・・・・・赤の２４だ、赤の２４に全額かけよう」
賭け人Ａ「フン、たいした自身だな・・・黒の２１！」

翔平「家族のことは今考えるな・・・お前には翔太郎さんみたいなー、・・・仲間がいるだろ」
フィリップ「！」
翔平「まあいいさ、さて行きますか」
ペガサスメモリ「Ｐｅｇａｓｕｓ！」
翔平「変・・・身！」

ロストドライバー「Ｐｅｇａｓｕｓ！」

ペガサス「仮面ライダーペガサス、行くぜ！」

フィリップ「いこう」

サイクロンメモリ「Ｃｙｃｌｏｎｅ！」

翔太郎「ああ」

ジョーカーメモリ「Ｊｏｋｅｒ！」

フィリップ・翔太郎「「変身！」」

ダブルドライバー「Ｃｙｃｌｏｎｅ－Ｊｏｋｅｒ！」

ヒートメモリ「Ｈｅａｔ！」

メタルメモリ「Ｍｅｔａｌ！」

ダブルドライバー「Ｈｅａｔ－Ｍｅｔａｌ！」

メタルシャフト「Ｍｅｔａｌ！マキシマムドライブ！」

ペガサスブレード「Ｐｅｇａｓｕｓ！マキシマムドライブ！」

ＷーＨＭ「「メタルブランディング！」」

ペガサス「必殺技の名前・・・よしっ！ペガサス・スターダスト！」

キンコンカンコン

放送「来週、全学年共通でテストがあります、」

翔平「へえー」

正夫「なんだろう」

放送「このテストは学力ごとにクラスわけをするためのテストです。ちなみに風邪で休んだら、最下級のクラスになります。」

バカ・アホな生徒達「「「「「「「「「えーーーー！！！」」」」」」」」」

翔平「はあ！？」

正夫「Σなぜに！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

バカ・アホな生徒達「「「「「「「「「えーーーー！！！」」」」

」」」」」」

翔平「はあ！？」

正夫「Σなぜに！」

放送「実は先月、この学校に画期的なシステムを導入しました。その名も「試験召喚システム」。科学とオカルトと偶然によって開発された、この試験召喚システムを試験的に採用し、学力低下が嘆かれる昨今に対応するため、本校ではいち早くこのシステムを導入しました。「試験召喚システム」とは試験の点数に応じた強さを持つ「召喚獣」を使用した戦争「試召戦争」でクラス全体で勝ち上がる、簡単に言うとゲームみたいな物です。」

翔平「へえー、おもしろそっ、」

――――――そして1週間後――――――

先生「では始めてください」
テストが始まった。

姫路「はあ・・・はあ・・・

？

姫路「はあ・・・はあ・・・、うっ、うう・・・」

明久「姫路さん！」

翔平「あっ、」
隣の席の姫路（ひめじ）　瑞希（みずき）が倒れた。それをもう片方の隣の席の吉井（よしい）　明（あき）久（ひさ）が助けた。顔が赤いな・・・熱だな。

翔平「先生、姫路さんが倒れたんですけど・・・」

先生「途中退席者は、得点を無とする。」

翔平「あなたは生徒が熱を出しているのにほうっておくんですか！？」

先生「それがルールだ、」

翔平「・・・先生、姫路さんを保健室へ連れて行くので、途中退席します。」

先生「松風・・・そうした場合、お前の得点も無得点になるがいいのか？」

翔平「・・・ええ、かまいませんよ、その前に・・・オラァ！！！」

先生「ぐふっ！」
俺は先生に腹パンをお見舞いした。

翔平「でもあんたのその態度は気に入らなくてね。だからあなた生徒から評判悪いんですよ。・・・つっても、気絶している人間に何言っても意味ないか・・・」

明久「なあ、俺も手伝うよ！」

翔平「ん？いいのか、途中退席は無得点だぜ。」

明久「うっ、」

翔平「お前はここでテスト受けてな、後は俺何とかすっから」

さてと・・・姫路さん、保健室に連れて行くか。

場所は保健室

ガラガラガラ↑扉を開ける音

明久「あっ、まだ起きてない？」

翔平「あっ、テスト終わったの、どうだった？」

明久「ま、まあまあかな」

姫路「うっ、うううう」

明久「あっ、起きた？」

姫路「ここは・・・？」

翔平「保健室だよ、テストの最中に倒れちゃったから、」

ガラガラガラ↑扉を開ける音

明久「あっ、鉄人」

翔平「ミスタージャイアントロボさん、どうしたんですか」

西村「だれが鉄人だ、だれがジャイアントロボだ。俺には西村（にしむら）　宗（そう）一（いち）という名前がある！」

翔平「まあまあ・・・それよりなんですか？」

西村「ん、テストの結果を私に来た。」

明久「えっ、ホントですか！？」

翔平「あっ、いいっす。多分俺、明久といっしょだと思うんで」

明久がもらった封筒の中に入っていた紙に書かれた文字は・・・

『Fクラス』

西村「ちなみに吉井、お前は欠席して無得点になったやつ以外で、お前は最も点数が悪かったので、お前にこの称号を与える。」

西野は明久にさらにもう一枚封筒を渡した。その封筒に入っていた紙に書いてあった文字は

『観察処分者』

観察処分者・・・それは学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分。基本的には教師の雑用係でありバカの代名詞である。

西野「そうだ、松風、お前にこの称号を与える。」

俺も封筒を渡された。その中の紙に書いてあるのは観察処分者を越える称号・・・

『黒の完全処分者』

黒の完全処分者・・・面倒なので後ほど説明シマス。

明久「・・・ｏｒｚ」

翔平「そう落ち込むなって。じゃあ姫路さん、早速俺たちその・・・２年Ｆ組に行ってくるわ。体調よくなったら来てね。」

俺は最初に渡された封筒を破り、中身を確認しながらながら、２年Ｆ組のある旧校舎に向かった。

まあ、確認しなくても俺がＦクラスであることに変わりは無いが。

第１２話ー バカと観察処分者とＦクラス（後書き）

奇跡的な人間「というわけで、今回の話で初登場の、吉井明久くんと姫路瑞希ちゃんです！」

明久「どーも」

姫路「よろしくお願いします」

翔平「まあ、仲間が増えてうれしいが、黒の完全処分者ってなんだ？」↑前書きから復活した。

奇跡的な人間「まあ、今のところ、観察処分者より悲惨な称号で、そのおかげで召喚獣が物を触れられて、痛みが召喚者に帰ってくるほか、黒金の腕輪を持っているってことぐらいかな」

翔平「Σもうほとんど確定じゃん！」

奇跡的な人間「と、言うわけで次回をお楽しみに！」

翔平「じゃ、じゃ～ね～！」

明久（僕達、この中でちゃんとやっていけるかな）

姫路（正直不安になってきました・・・）

第１３話－俺とバカ達と召喚戦争（前書き）

奇跡的な人間「うーん」

明久「どうしたの」

奇跡的な人間「いやー、仮面ライダーのほうでもＯＯＯ（オーズ）を参戦させようと思うんだけど、そうするとタイトルがややこしくなるんだよねー。そしたら下手したらどっちか消さない取って思うんだよね、」

翔平「ふーん、好きにしたら」←今世紀最大の棒読み

明久「Σお前はいいよ！一応この小説の主人公だから消えなくてすんで！僕は・・・」

姫路「それにＯＯＯ（オーズ）いれるなら、『ＡｔｏＺ／運命のガイアメモリ』の少し前ぐらいがいいと思います！」

奇跡的な人間「うーん・・・そうだねＯＯＯ（オーズ）だすのもう少し待ってみるよ」

翔平「ツーわけで、スタート！！！！」←ものすごい早口

奇跡的な人間「勝手にやらないでー！」

第13話ー俺とバカ達と召喚戦争

前回のあらすじ：
放送「実は先月、この学校に画期的なシステムを導入しました。その名も「試験召喚システム」。科学とオカルトと偶然によって開発された、この試験召喚システムを試験的に採用し、学力低下が嘆かれる昨今に対応するため、本校ではいち早くこのシステムを導入しました。「試験召喚システム」とは試験の点数に応じた強さを持つ「召喚獣」を使用した戦争「試召戦争」でクラス全体で勝ち上がる、簡単に言うとゲームみたいな物です。」

先生「では始めてください」

姫路「はあ・・・はあ・・・、うっ、うう・・・」

明久「姫路さん！」

翔平「あっ、先生、姫路さんが倒れたんですけど・・・」

先生「途中退席者は、得点を無とする。」

翔平「・・・先生、姫路さんを保健室へ連れて行くので、途中退席します。」

先生「松風・・・そうした場合、お前の得点も無得点になるがいいのか？」

翔平「・・・ええ、かまいませんよ、その前に・・・オラァ！！！」

先生「ぐふっ！」

翔平「でもあんたのその態度は気に入らなくてね。だからあなた生徒から評判悪いんですよ。・・・つっても、気絶している人間に何言っても意味ないか・・・」

ガラガラガラ↑扉を開ける音

明久「あっ、鉄人」

翔平「ミスタージャイアントロボさん、どうしたんですか」

西村「だれが鉄人だ、だれがジャイアントロボだ。俺には西村（にしむら）宗（そう）一（いち）という名前がある！」

明久がもらった封筒の中に入っていた紙に書かれた文字は・・・

『Ｆクラス』

西村「ちなみに吉井、お前は欠席して無得点になったやつ以外で、お前は最も点数が悪かったので、お前にこの称号を与える。」

西野は明久にさらにもう一枚封筒を渡した。その封筒に入っていた紙に書いてあった文字は

『観察処分者』

西野「そうだ、松風、お前にこの称号を与える。」

俺も封筒を渡された。その中の紙に書いてあるのは観察処分者を越える称号・・・

『黒の完全処分者』

＊＊＊＊＊＊＊

黒の完全処分者・・・それは観察処分者を越える称号。『『黒の』』とは、完全処分者は、『『黒』』と『『白』』、両方存在し、黒の完全処分者は、観察処分者のように雑用をこなすため、召喚獣を特例として物に触れることができるが、召喚獣の受けた痛みや疲労は召喚者にフィードバックされる。おまけに黒金の腕輪を使用することが許された称号。

明久「・・・ｏｒｚ」

翔平「そう落ち込むなって。じゃあ姫路さん、早速俺たちその・・・2年F組に行ってくるわ。体調よくなったら来てね。」

しばらく歩いていると、成績最上級のクラス、2年A組の教室が見えてきた。

翔平「ほえー・・・」

明久「スゲー・・・システムディスクにリクナイディングシート・・・！」

翔平「ノートパソコン支給に、・・・フリードリンクサーバーだ！」

明久「俺たちの教室もあんなのだったらいいな・・・」

翔平「そうだな・・・あっ、霧島だ・・・あいつやっぱここ（Aクラス）かー・・・」

俺は教室の中にいた霧島翔子（きりしましょうこ）を見た。

翔平「じゃっ、そんな俺たちの希望を胸に、Fクラスに行きますか！」

さらにBクラス、Cクラス、Dクラスが見えてきた。

翔平「なんか、どんどん設備が悪くなっているような・・・」

明久「きっ・・、気のせいだよ！・・・多分」

Aクラス、Bクラス、Cクラス、Dクラスがある新校舎を抜けると、どう見ても使えそうに無いおんぼろな旧校舎が見えてきた。

翔平・明久「「・・・ｏｒｚ」」

翔平「Ｅクラスまでは・・・Ｅクラスまでは許せたよ・・・」

明久「さすがにこれはねえーよ・・・」

俺たちのクラス、Ｆクラスは、どこもかしこも壊れていて、畳、机はちゃぶ台で代用、いすはぼろぼろの座布団で代用している。どこもかしこも壊れていて、女子なんてどこにもいない・・・。あっ、やっぱ一人・・・いや二人いた。

翔平「くそっ、これが各社社会ってヤツか・・・」

福原「二人とも、席についてください」

明久「はーい・・・」

翔平「ふぁーい！席はどこですか、」

福原「好きな席にどうぞ。」

明久「席も決まっていないの！」

にしてもこの教室Ｆクラスは学力最低ランクの女に飢えた野郎共のテリトリーみたいなものだからな・・・スッゲー気持ち悪くなってきた。

福原「どーも、私がこのクラスの担任の福原慎（ふくはらしん）です。よろｓ・・・

福原が言いかけていると、席が壊れた。

福原「工具箱を取ってきます。」

翔平「・・・あっ、俺のも壊れた。」

雄二「ボンドなら後ろにあるぞ」

翔平「あっ、ありがと・・・えっ、雄二もこのクラス！？」
坂本雄二（さかもとゆうじ）はご親切にボンドの場所を教えてくれた。

雄二「俺だけじゃないぜ」

美波「ハロハロ～♪」

明久「島田さん！そっか、やっぱり島田さんはFクラスだよね！」

美波「［怒］それってどういう意味！内がバカだとでも言いたいの！！」

翔平「まあまあ・・・関節技決めていると、いつまでたっても・・・ていうか一生答えてくれないと思うよ！！」

明久「胸が無いからものすごく痛む・・・」

ブチ↑マジ切れモードになった音

ドカァ！！！↑明久が美波にぶん殴られる音

ゆらっ↑美波のスカートが風に揺らいだ音

ムッツリーニ「！」

キラーン↑ムッツリーニ（土屋（つちや）　康太（こうた））の眼が輝いた音

ムッツリーニ「みっ、見えそうで、見え・・・」

美波「ウチは帰国子女で日本語がうまく読めないのよ、」

秀吉「あいからわずにぎやかじゃのう」

明久「痛つつつつつ・・・秀吉？」

秀吉「わしもFクラスじゃ、よろしくのう」

がらがらがら↑ドアの扉が開いた音

正夫「はあ・・・はあ・・・遅れました！」

翔平「あっ正夫、どうしたんだ？」

正夫「いやちょっと、この校舎歩いていたら、いきなり穴あいて・・・抜けるのにすごい体力使ったんだ・・・」

翔平「ふーん、そーっ」↑ものすごい棒読み

正夫「Σなにっ、その反応！？」

翔平「あーっ、いやっお前もやっぱりFクラスなんだなって思って」

正夫「Σそれひどいよ！一応勉強したんだから！」

フィリップ「君達少し静かにしたまえ」

明久「あれっ、フィリップなんでFクラスなの！？」
明久はなぜ驚いているのかというと、フィリップはテストではいつも１００点を取っているからだ。・・・まあ、先生への態度はあれなので内申は最悪なのだが。

雄二「居眠りしていたからだろ、あいつ一番前の席で、明久は後ろだから分からないか。」
雄二の言葉で明久は、ああなるほど、といったが実はフィリップはテストの時間中、Wに変身していたので、意識は翔太郎のところにいって、体は空になっていたからだ。

秀吉「Fクラスはこれで全員か？」

翔平「いやっ、あと一人来るはずだぜ。」

がらがらがら←ドアの扉が開いた音

姫路「遅れました！」

明久「姫路さん！もう体は大丈夫なの？」

姫路「はい、ご迷惑おかけしました。」

翔平（これで全員そろったか・・・少し寝るか。）

姫路「あっ、あの、松風さんもありがとうございい・・」

翔平「くかーー、」

姫路「あっ寝ていますか」

雄二「なあ、みんな聞いてくれ！」

俺はこのときまだ気付いていなかった・・・Fクラスが試験召喚戦争を他のクラスに仕掛けるということを・・・俺は気持ちよく寝ていた・・・

第１４話－俺と召喚獣と黒い腕輪（前書き）

バカテスト－ｂａｋａ　ｔｅｓｔ－
問題：紀元前２０２年に中国を統一したのは『漢』ですが、『漢』の前に中国を支配していたのは何ですか？

姫路瑞希の答え
秦

教師のコメント
正解です。特にありません。

吉井明久の答え
カタカナ

教師のコメント
それは漢字です。

松風翔平のコメント
三＋人＋ノ＋木＝秦

教師のコメント
バカでも理解できそうな答えですね。後で吉井君に教えてください。

松風翔平のコメント
明久、どんな答えだしたんですか？？

第１４話ー俺と召喚獣と黒い腕輪

前回のあらすじ：

明久「スゲー・・・システムディスクにリクナイディングシート・・・！」

翔平「ノートパソコン支給に、・・・フリードリンクサーバーだ！」

明久「俺たちの教室もあんなのだったらいいな・・・」

翔平「そうだな・・・あっ、霧島だ・・・あいつやっぱここ（Ａクラス）かー・・・」

翔平「くそっ、これが各社社会ってヤツか・・・」

福原「二人とも、席についてください」

明久「はーい・・・」

翔平「ふぁーい！席はどこですか、」

福原「好きな席にどうぞ。」

明久「席も決まっていないの！」

秀吉「Fクラスはこれで全員か？」

翔平「いやっ、あと一人来るはずだぜ。」

がらがらがら←ドアの扉が開いた音

姫路「遅れました！」

明久「姫路さん！もう体は大丈夫なの？」

姫路「はい、ご迷惑おかけしました。」

翔平（これで全員そろったか・・・少し寝るか。）

姫路「あっ、あの、松風さんもありがとうございい・・」

翔平「くかーー、」

姫路「あっ寝ていますか」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

雄二「なあ、みんな聞いてくれ！」

俺はこのときまだ気付いていなかった・・・Fクラスが試験召喚戦争を他のクラスに仕掛けるということを・・・俺は気持ちよく寝ていた・・・

――――数分後――――

明久「おきてっ、おきてっ！」

雄二「仕方ない・・・島田、起こしてやれ」

美波「はーい・・・それっ！」

どかん！！！↑俺が美波に関節技決められた音

翔平「おごは！！！」

雄二「まだ起きないか・・・もっとや・・・

翔平「ギブギブギブギブギブギブギブ！！！！！起きているから！！！」

雄二「起きたか・・・では明久、松風、前に出てくれ」

明久「オーケー」

翔平「まっ、待って・・・体が痛んで動けないんでぃすが・・・」

明久「あー分かった、つれてくよ」

翔平「あっ、待ってそこ特にいたm・・・痛つつつつつうつつ！！！！」

明久「あっ、ごめん」

雄二「みんな、聞いてくれ！この吉井明久は観察処分者の称号を持ち、松風翔平はその上を行く、黒の完全処分者の称号を持っている！まず、みんなにこの二つの照合について説明してやってくれ。」

明久「えっ、じゃあ僕は観察処分者について説明します。観察処分者って言うのは、学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分のことで、召喚獣を物に触れることができる能力が付きます。

F組「おお～」

明久「ただその分、召喚獣の受けた痛みや疲労は召喚者に戻ってくるから最悪らしいです。物体を触れる能力のせいで基本的には教師の雑用係みたいなものです。」

秀吉「ついでにいうとバカの代名詞じゃな、」

翔平「えーと、痛！・・・黒の完全処理者って言うのは・・・基本的に観察処理者となんら変わらないんで前略。・・・ついでに黒金の腕輪が使えるだけ、」

そう言うと、姫路さんがゆっくりと手を上げた。

姫路「あのー・・・」

翔平「ん？何？」

姫路「黒金の腕輪ってなんですか？」

翔平「えーと・・・みんな召喚獣を召喚するには先生の許可が必要って知っているよね・・・」

明久「Σえっ、そうなの！？」

翔平「・・・orz、・・・そうなんだけど、この黒金の腕輪を使うと先生の許可無く召喚獣を召喚することができる、スーパーアイテムなんです！」

F組「うをーーー」

翔平「つーわけで早速使ってみたいと思いやす。えーと、科目は何がいい？」

ムッツリーニ「・・・保健体育で！」

翔平「分かった保健体育な・・・ふうー・・・起動『アウェイクン』！！」

俺の左腕に装着してある黒金の腕輪からムッツリーニ指定の保健体育の召喚フィールドが作成された。

F組「おおお～」

翔平「じゃー続けて～・・・サ～モン！」

俺は召喚獣を呼び出すキーワードをどこぞの鍵を使って変身する海賊戦隊の持つ『モ〇イレーツ』からでる声のようにカッコ良く叫んだが・・・

翔平（召喚獣）「へっ、へへへ・・・」

俺の召喚獣は真っ白になりながら床に這い蹲っていた。今にも「燃えた・・・燃え尽きたよ・・・真っ○になっ」って言いそうだ。

姫路「どうしたんですか？」

翔平「あっ、俺途中退席したから得点無効になっていたんだった。ははは・・・」

雄二「まあ、それはおいといて・・・話を戻す、誰かEクラスに宣戦布告していってくれ！」

翔平「え得えええ絵えええーーー！！！初耳なんですけど！！！」

秀吉「寝取ったからのう・・・」

正夫「それとそこ・・・「得」とか「絵」とかじゃなくてふつうに「え」だから」

美波「でも行くとしたら・・・」

みんなの視線は明久に・・・

明久「何で僕なの！？」

姫路「あの～私が行きましょうか？」

翔平「それはダメ！何されるかわかんないよ！？」

姫路「そうですか・・・」

ぶほっ↑ものすごい勢いで隙間風が入ってきた音

姫路「きゃっ！」

姫路さんが席に着こうとすると、強い隙間風が姫路さんのスカートを動かした。それを見たムッツリーニは・・・

ブヒュウウウウ↑ムッツリーニの鼻血ブー音

ムッツリーニ「くわっ！」びくびくびくびく

翔平「ムッツリーニ！」

翔平「ムッツリーニ！しっかりしろ！しっかりするんだ！」

ムッツリーニ「み・・・・・・・み・・・・・・・。」

翔平「しゃべるんじゃない！今、今医者を呼ぶから・・・！」

秀吉「普通に保健室に行った方が早いのではないか？」

ムッツリーニ「みっ・・みっ・・・・・う・・・・・・。」

翔平「どうしたんだムッツリーニ！？言ってみろ！？」

ムッツリーニ「み・・・・・・・水色・・・・・。」　（バタリ）

翔平「ムッツリーーーーーニーーーーー！！！」？

翔平「誰か・・・誰か助けてくださいーーーーーーーー！！！」

雄二「なあ松風、（宣戦布告）たのめるか？」

翔平「ああ・・・ムッツリーニ、君の死は無駄にしない！行くぞ、明久！！」

明久「えっ、ちょっと待ってなんで僕まで・・・たすけて・・・助けてーー！！！」

Fクラス一同「がんばれー」↑みんな棒読み

そして結局

明久「思いっきり殴られたよっ！ねえ！」

秀吉「それよりわしは松風が無傷なのか気になる・・・」

翔平「まあいいじゃないの、」

明久「よくないよ！人を盾にしといて！」

翔平「Eクラスとの試験召喚戦争まで後2日、張り切っていいこー」

Fクラス一同「おー！」

明久「無視しないでえー！！」

第１５話ーＦとＥと召喚戦争（前書き）

バカテスト―ｂａｋａ　ｔｅｓｔ―
問題：あなたはこの学校の試験召喚システムのことをどう思いますか。

姫路瑞希の答え
争いをするのは良くないと思います。

教師のコメント
姫路さんの言うようによくないかもしれませんが、これも授業のいっかんです。それにこのシステムによって結束力が高まると思いますよ。

吉井明久の答え
雑用係　反対

教師のコメント
ならもっと勉強しましょう。

吉井明久のコメント
無理ッス

ムッツリーニの答え
チャンスがあればパンチラを撮りたい・・・

教師のコメント

コメントしづらいです

紅正夫の答え
学費が安くなって最高です！

教師のコメント
このシステムによって多くのスポンサーが付いて学費が安くなりましたが、あなたの喜ぶポイントはそこですか！？

松風翔平の答え
趣味にしたいほど面白い

教師のコメント
具体的にどこが？

松風翔平の答え
俺の分身である召喚獣が他の召喚獣を痛めつけるところがなんともいえない。本物やると色々メンドーだから。これ見てストレス解消。

教師のコメント
あなたは鬼ですか

第１５話ーＦとＥと召喚戦争

前回のあらすじ：

雄二「みんな、聞いてくれ！この吉井明久は観察処分者の称号を持ち、松風翔平はその上を行く、黒の完全処分者の称号を持っている！まず、みんなにこの二つの称号について説明してやってくれ。」

明久「えっ、じゃあ僕は観察処分者について説明します。観察処分者って言うのは、学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分のことで、召喚獣を物に触れることができる能力が付きます。ただその分、召喚獣の受けた痛みや疲労は召喚者に戻ってくるから最悪らしいです。物体を触れる能力のせいで基本的には教師の雑用係みたいなものです。」

秀吉「ついでにいうとバカの代名詞じゃな、」

翔平「えーと、痛！・・・黒の完全処理者って言うのは・・・基本的に観察処理者となんら変わらないんで前略。・・・ついでに黒金の腕輪が使えるだけ、」

姫路「黒金の腕輪ってなんですか？」

翔平「えーと・・・みんな召喚獣を召喚するには先生の許可が必要って知っているよね・・・」

明久「Σえっ、そうなの！？」

翔平「・・・orz、・・・そうなんだけど、この黒金の腕輪を使うと先生の許可無く召喚獣を召喚することができる、スーパーアイテムなんです！」

ムッツリーニ「くわっ！」びくびくびくびく

翔平「ムッツリーニ！ムッツリーニ！しっかりしろ！しっかりするんだ！」

ムッツリーニ「み・・・・・・・・・み・・・・・・・。」

翔平「しゃべるんじゃない！今、今医者を呼ぶから・・・・！」

秀吉「普通に保健室に行った方が早いのではないか？」

ムッツリーニ「みっ・・みっ・・・・・う・・・・・・。」

翔平「どうしたんだムッツリーニ！？言ってみろ！？」

ムッツリーニ「み・・・・・・・水色・・・・・。」　（バタリ）

翔平「ムッツリーーーーーニーーーーー！！！

誰か・・・誰か助けてくださいーーーーーーーー！！！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ｓｉｄｅ　翔平

翔平「ふぁー、今何時だ？」

俺は時計を見た。まだ時間大丈夫だな。

翔平「いってきまーす、つっても誰もいないか・・・」

実を言うと俺は一人暮らしをしている。

バタン！↑ドアを閉める音。

翔平「あっ、明久」

明久「あっ、翔平」

翔平「お前もこのアパートの住人なの？」

明久「お前もそうだったの！？」

翔平「なあ、俺の愛車に乗っていかないか？」

明久「愛車って車！？」

翔平「ちげーバイクに決まっているだろ」

俺たちは駐車場に向かった。俺の愛車は・・・イクサリオンＩＩ。

先日嶋さんにもらった。

明久「お前、バイクの免許持っていたの？」

翔平「当たり前だ・・・ほら」

俺は財布から免許証をだして、明久に見せた。

翔平「なっ、・・・これ、俺のスペアのヘルメット貸すから後ろ乗れよ、」

明久「あっ、でも俺、やっぱいいや」

翔平「ふーん、そう・・・でも歩いていくと確実に遅刻だぜ。」

明久「えっ、時計見せて、」

翔平「ほら」

明久「・・・乗せていってください」

翔平「オーケイ、出発！」

んでもって学校到着！

雄二「みんな、今日が試験召喚戦争当日だ、まず作戦を再確認するっ！」

俺たちの作戦・・・それは数学の長谷川先生を拉致し、数学のフィールドで戦う戦法。そしてみんなが戦っている間、振り分け試験で途中退席した俺と姫路さんは回復試験を受け、途中参戦する寸法だ。

翔平「それじゃあ、みなの者、配置につけー！」

雄二「開戦だ！」

Ｆ組一同「オー！！」

翔平「じゃっ、姫路さん回復試験がんばりましょう！」

姫路「はいっ！」

ついに開戦・・・配置を説明すると精鋭が正夫、秀吉、美波、ムッツリーニ、守備、ＦＦＦ団　団員、そして代表の雄二と最終防衛の観察処分者　明久。

ｓｉｄｅ　正夫

今回のフィールドは数学。島田さんは得意だっていうし、僕もそこそこ得意だ。まず、精鋭が突破口を作って相手の守備をたたかないと！

正夫「紅正夫、行きます！」

美波「島田美波、行きます！」

秀吉「木下秀吉、助太刀する！」

ムッツリーニ「土屋康太、同じく！」

美波「試験召喚獣・・・！」

正夫・美波・秀吉・ムッツリーニ「「「「サモン！」」」」

島田さんの召喚獣は軍服の格好に武器はサーベル。
秀吉のは服装は袴、武器に薙刀の姿の召喚獣。
ムッツリーニ召喚獣は忍者を模した姿で、小太刀二刀流のスタイル。
そして僕の召喚獣は、大牙伯父さんの前のキング、つまり大牙伯父さんのお父さんが来ていた服に良く似ていて、武器はザンバットソードのザンバットバットなしバージョンと別世界のキバがファイナルフォームライドした姿のアローの２つだ。僕達の点数は島田さんが８９点、ムッツリーニが２５点、秀吉が５１点。そして僕は６８点だ。

正夫「よーし！」
僕は軽く近くにいたＥクラスの人の召喚獣を僕の召喚獣が攻撃した。
しかし、相手も手ごわく、連携で反撃された。

正夫「ぐわっ！」
他のＦクラスのみんなはムッツリーニ並かそれ以下の点数・・・どう考えても勝ち目は無い！

ｓｉｄｅ翔平
外は騒がしい、もっと点数を稼がないと、しょっぱから負けるかもしれない・・・

教師「二人とも、テストを止めてください！」

翔平「ふう、終わった・・・」
俺がテストを終わらせたのはみんなが追い詰められた時。

教師「結果を発表します。姫路さん、４１２点・・・松風君５ひゃ・・・」

翔平「結果はいいです、それより早く参戦しないとやばいでしょ。」

――外では――

美波「このままじゃあ・・・負けちゃう！」

翔平「みんな待たせたな・・・俺、参上！」

俺は皆さんご存知、仮面ライダー電王に出てくる赤色のイマジン、『モモタロス』の決め台詞と決めポーズをまねて（もっともあったこともないし、知っているわけでもないため真似とは言え無いだろうが）、先陣を切った。

翔平「松風翔平・・・いけるぜ！みんな待たせたな！」

雄二「全くだ・・・今はお前が頼りだ！」

翔平「ああ分かった・・・試験召喚獣サモン！」

俺の召喚獣は、改造学ラン（足元まで届き、内側に鳳凰の刺繍）と、武器は肩にかけた２本の日本刀、腰に下げてある２丁のハンドガン、背中に背負っているマシンガン。そして改造学ランの中に収納してあるスタンガンが二つある。

そして気になる得点は・・・

中林「数学・・・５３８点！？」

Ｅクラス代表の中林（なかばやし）　宏美（ひろみ）も驚いている。

翔平「まっ、これでも低いほうなんだけどね、他の教科も軽く５００点以上はいってるし、大体はこの点数以上だぜ。」

中林「そっ、そんな・・・これは・・・学年主席並、・・・もしくはそれ以上！」

翔平「Ｅクラス大将（？）中林宏美の首・・・Ｆ組代表（自称）参謀、松風翔平、首とったり～～！！」

『Ｅクラス　中林宏美　数学０点』

長谷川「試験召喚戦争・・・Ｆクラスの勝ち！」

Ｆクラス一同「やったー！」

しかし、勝利を喜んでいるのをよそに、俺はひとつのいやな予感がした。

西村「戦死者は補習ーーー！！！！」

翔平「あっ、ジャイアントロボセンセだ」

西村「・・・お前も補習するか？」

翔平「いえ、遠慮しときます！」

なるほど、これがいやな予感か・・・戦死者のみんな、ファイトー

雄二「というわけで、なんなくEクラスの設備ゲットだ！」

Fクラス一同「イエーイ！」

明久「いやーすごくつかれたねっ！」

秀吉「明久、おぬしは何もやっとらんだろ。」

こうして俺たちの最初の試験召喚戦争は俺たちの勝利で終わった。

第１６話ーＣと宣戦布告とアウェイクン（前書き）

バカテスト―ｂａｋａ　ｔｅｓｔ―

問題：元は百姓の息子で、織田信長の家来になり、後に天下統一を成し遂げたのは誰でしょう。

姫路瑞希・木下秀吉の答え

豊臣秀吉

教師のコメント

正解です。木下さんは最近演劇のほうで豊臣秀吉をやっているので簡単でしたか。

島田美波の答え

豊臣秀吉

教師のコメント

確かに昔の人物は藤原道長のように苗字の跡に『の』を入れますが違います。とても惜しいです。

吉井明久・土屋康太の答え

木下秀吉

教師のコメント

確かに木下君は演劇で豊臣秀吉の役をしていますし、苗字も旧姓なので惜しいですが、違います。

松風翔平の答え

A．サル

or

B．猿面冠者

or

C．はげ鼠

の内どれ？

教師のコメント

どれも豊臣秀吉のあだ名ですが、ちゃんと名前で呼んであげましょう。

第１６話ーCと宣戦布告とアウェイクン

前回のあらすじ：
翔平「それじゃあ、みなの者、配置につけー！」
雄二「開戦だ！」

正夫「紅正夫、行きます！」
美波「島田美波、行きます！」
秀吉「木下秀吉、助太刀する！」
ムッツリーニ「土屋康太、同じく！」
美波「試験召喚獣・・・！」
正夫・美波・秀吉・ムッツリーニ「「「「サモン！」」」」

翔平「みんな待たせたな・・・俺、参上！
松風翔平・・・いけるぜ！みんな待たせたな！」
雄二「全くだ・・・今はお前が頼りだ！」
翔平「ああ分かった・・・試験召喚獣サモン！」

中林「数学・・・５３８点！？」

翔平「まっ、これでも低いほうなんだけどね、他の教科も軽く５００点以上はいってるし、大体はこの点数以上だぜ。」

中林「そっ、そんな・・・これは・・・学年主席並、・・・もしくはそれ以上！」

翔平「Ｅクラス大将（？）中林宏美の首・・・Ｆ組代表（自称）参謀、松風翔平、首とったり～～！！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ｓｉｄｅ翔平

Ｅクラスとの試召戦争は俺たちの勝ちで終わった。ちなみに俺は今どこにいるかというと・・・

翔平「我等Ｆクラスは、Ｃクラスに宣戦布告するっ！」

・・・Ｃクラスで宣戦布告している。

――――数分後、Ｆクラスにて――――

翔平「・・・ボコられてきますた。」

秀吉「そのようには見えぬのじゃがのう・・・」

明久「どこがボコられたんだよ！無傷じゃないか！」

翔平「俺は別に俺がボコられて来たとは言ってないぜ・・・俺の盾にしたやつがボコられたのさ！」

正夫「Σそれもヒドイ！」

雄二「まあ、ちゃんと宣戦布告してきたのか？」

翔平「もちッス！」

雄二「そうか・・・今回の試召戦争では、相手が教科を決めることになっている。」

ムッツリーニ「情報によると、Ｃクラスのほとんどは現国が得意らしい。」

翔平「へえーよく知っているねっ、」

ムッツリーニ「・・・・・・女子のだけだけど」

雄二「ならムッツリーニの情報を信じて相手が現国の教科を選択するとしよう！そうすると現国が得意なヤツを主力にする必要がある！得意なヤツはいないか！」

姫路「私、少しなら・・・」

翔平「俺は・・・不得意の部類だけど他の奴等よりはマシだろっ♪」

雄二「そうか・・・なら姫路には試召戦争の日までの間、クラスのみんなに教えてやってくれっ！」

翔平「Σ俺は！？」

雄二「松風、お前には明久や秀吉、紅にムッツリーニといっしょに召喚獣の動かし方を特訓してくれ。これはお前にしかできない！」

翔平「あっーなるほどなっ！」

俺は黒金の腕輪を装着している左腕を軽く上げた。

翔平「おーいみんなー、屋上に集まれよー」

そして屋上へ・・・

翔平「つーわけで・・・ア～ウェイクン！」

俺は教科を現国にセットし、召喚フィールドを作成した。教師が作る物より若干小さめだが、文句は言えないか・・・

翔平「まず、みんなの点数を見る、サモン！」

明久・正夫・秀吉・ムッツリーニ「「「「サモン！」」」」

俺の現国の得点は５１３点とＡクラス並だ・・・当然だがな。

俺は明久の召喚獣を見た。得点は・・・２４点。

ムッツリーニは明久より多少良く３１点。

正夫は５８点とそこそこある。

秀吉は６７点。

翔平「正夫と秀吉はいい・・・明久、ムッツリーニ！何をどうしたらこんなひどい点になる！」

明久「僕はその・・・仕送りの金を有効的に使うことを考えるのに、頭がいっぱいなんだ！」

翔平「うるせーだまれ！この間始めてお前が隣って知ったけど、前からお前が隣でゲームやったりとか、エ○本読む声が筒抜けなんだよ！」

明久「違うよ！それはエ○本じゃなくて・・・ムッツリーニから買った保健体育の参考書だよっ！」

翔平「ムッツリーニ、お前が明久に売ったその本・・・見せてくれ」

ムッツリーニ「はい・・・」

翔平「・・・ムッツリーニ、この本、俺にも売ってくれ」

ムッツリーニ「了解・・・」

翔平「まっ、まあ明久は一応保健体育の予習していたとして・・・ムッツリーニもこの参考書売るのに時間使っているから仕方ないか・・・・・・・・・んじゃ４人ともっ！召喚獣の訓練、行くぞー！」

明久・正夫・秀吉・ムッツリーニ「「「「オーー！！！」」」」

試召戦争までの５日、どこまでレベルアップするかにかかっている

な・・・

第17話ーバカとライダーとイヌ野郎（前書き）

奇跡的な人間「仮面ライダー、リ・ターン！」

翔平「最近勉強ばっかで体が鈍っていたんだ。ストレス解消と行くか！」

奇跡的な人間「やり過ぎないようにね・・・」

第17話ーバカとライダーとイヌ野郎

前回のあらすじ：
翔平「我等Fクラスは、Cクラスに宣戦布告するっ！」

ムッツリーニ「情報によると、Cクラスのほとんどは現国が得意らしい。」
翔平「へえーよく知っているねっ、」
ムッツリーニ「・・・・・・女子のだけだけど」

翔平「つーわけで・・・ア～ウェイクン！
まず、みんなの点数を見る、サモン！」
明久・正夫・秀吉・ムッツリーニ「「「「サモン！」」」」

翔平「うるせーだまれ！この間始めてお前が隣って知ったけど、前からお前が隣でゲームやったりとか、エ○本読む声が筒抜けなんだよ！」
明久「違うよ！それはエ○本じゃなくて・・・ムッツリーニから買った保健体育の参考書だよっ！」

翔平「ムッツリーニ、お前が明久に売ったその本・・・見せてくれ」

ムッツリーニ「はい・・・」

翔平「・・・ムッツリーニ、この本、俺にも売ってくれ」

ムッツリーニ「了解・・・」

翔平「まっ、まあ明久は一応保健体育の予習していたとして・・・ムッツリーニもこの参考書売るのに時間使っているから仕方ないか・・・・・・・・・・んじゃ４人ともっ！召喚獣の訓練、行くぞー！」

明久・正夫・秀吉・ムッツリーニ「「「「オーー！！！」」」」

＊＊＊＊＊＊＊

ｓｉｄｅ翔平

Ｃクラスとの試召戦争まで後１日・・・最初は現国の成績がほとんど１桁だったＦクラスの連中も、姫路さんのおかげで２０点台ぐらい行ったし、もともと観察処分者で先生の雑用係として使われている明久以外の正夫や秀吉、ムッツリーニも召喚獣の扱いになれてきたっぽいし、明久は成績を３０点台までに上げた。後の１日でどこまで成績が良くなったとしても、敵は学年で三番目のクラス・・・どうやっても勝てない・・・後初チームワークをあげるのが先決かな。でも、あのくそどもの結束力をどう高めるかが勝敗の鍵だな。

ちなみに俺と正夫、明久、秀吉、ムッツリーニ、雄二、姫路さんに

美波は今、カフェ・マル・ダムールで来ている。店内はおにゃんこクラブの『セーラー服を脱がさないで』が流れている。

木戸「あらっ、正夫君に翔平くんいらっしゃい。今日はプライベートで？」

翔平「はいっ、コーヒー飲もうかと・・・・」

木戸「後ろの子達は、お友達？」

正夫「はい、」

木戸「そうっ、じゃあそこの席にでも座って」

俺たちはカフェ・マル・ダムールのオーナー、木戸明（きどあきら）さんの行った席に座った。

姫路「わあー何かレトロですねー」

美波「この飾り皿って・・・」

美波は２０数個飾られてある飾り皿を見ながら言った。

木野「それはねー、開店以来、毎年増えている飾り皿なのよ。これを見ていると若かったころを思い出すなー」

美波「へえー」

雄二「みんな、Ｃクラスとの試験召喚戦争まであと１日、明日だ。まずは作戦の確認をしておく。まず、松風を中心に敵陣をたたき、スキを付いて先生の雑用として使われて召喚獣の使いになれている

明久がCクラス代表である小山（こやま）　友香（ゆうか）をたたく作戦だが、これでいいか」

明久「ああ」

秀吉「異議なし」

ムッツリーニ「・・・・・・同じく」

美波「ないよ、」

姫路「ありません」

正夫「いいんじゃない」

翔平「問題ないな、少し単純だがいけるだろう」

雄二「そうか」

俺たちはその後それぞれいろいろな飲み物を飲みおえた後、解散した。

翔平「さーて、家帰っても何にもしないし、そこらへんブラブラするか、」

明久「あっ、俺はいいや」

翔平「そっかじゃあな、また明日。」

――――数分後――――

暇。ものすごい暇。何にもやること無い。あっ、そういやこの先行ったら『Ｒｅｓｔａｕｒａｎｔ　ＡＧＩＴＯ』あるな。そこで飯食うか。

しかし、その瞬間・・・

翔平（！！）

俺の頭の中にイメージが出てきた、明久だ。明久の背後にはファンガイアがいた。

翔平「明久が危ない！」

俺はイクサリオンＩＩに乗り、家の方向にバイクを走らせた。

ｓｉｄｅ明久

家帰ったらまずカップめん食って・・・それから何しようかな

ドシッ、ドシッ

変な足音が聞こえる。なんだろう？僕は振り返った、そこにいたのは・・・

ドッグファンガイア「ライフ・・・エナジー！」

・・・ファンガイアだ

ｓｉｄｅ翔平

明久が見えてきた。・・・そうしてもう一人。イヌっぽいファンガイアだ。

襲われている！助けないと！この、修復間もないイクサＶ２で！

イクサナックルＶ２「レ・デ・ィ」

翔平「変身！」

イクサナックルＶ２（イクサベルトＶ２）「フィ・ス・ト・オ・ン」

キィーン！ヒューン・・・ピロロ・・・キュイッピルルッジャキィーン！！

イクサＶ２　Ｂ－Ｍ「はああ！！！」

ドッグファンガイア「ぐわっ！」

明久「へっ！？」

イクサＶ－２「よしっ」

俺はイクサカリバー・カリバーモードを取り出し、ファンガイアを斬った。

イクサＶ－２「とどめはこの新しいフエッスルでっ！」

俺はメンテナンスと共に新開発されたフエッスル、ブレイクフエッスルを取り出した。

イクサベルトＶ２「イ・ク・サ・ブ・レ・イ・ク・ラ・イ・ズ・ア・ッ・プ」

イクサブレイク・・・それはイクサにとってもっとも足りなかった格闘戦での必殺技・・・右足に高電圧をあつめ、とび蹴りで敵に攻

撃させる技。

イクサＶ２「そりゃ！」

ドッグファンガイア「ぐわあああああ！！！！」

ドッグファンガイアは、全身がステンドガラス状になり、粉々になった。

一件落着か・・・

明久「あっ、あの・・・」

あっやべっ見られた？

明久「あなたは誰ですか？」

あっ、変身するところ見られてないんだ。こういう場合、こう言った方がいいのか・・・な？

イクサ「仮面・・・ライダー・・・仮面ライダーだ」

俺はイクサリオンＩＩに乗りその場を去った。

明久「仮面・・・ライダー・・・」

第１８話－現国とＦＦＦ団とＡクラス（前書き）

バカテスト－ｂａｋａ　ｔｅｓｔ－
問題：以下の意味を持つことわざを答えなさい
（１）得意な事でも失敗してしまう事
（２）悪い事があったうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え
（１）弘法も筆の誤り
（２）泣きっ面に蜂

教師のコメント
正解です。他にも（１）なら『河童の川流れ』、『猿も木から落ちる』、（２）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え
（１）弘法の川流れ

教師のコメント
シュールな光景ですね。

吉井明久の答え
（２）泣きっ面蹴ったり

教師のコメント
君は鬼ですか。

紅正夫の答え
（1）バイオリンの糸がすぐ切れる

教師のコメント
それは個人的なことではないでしょうか？

松風翔平の答え
（1）オデノカラダバボドボドダ！
（2）戦死者は補習だー！！！

教師のコメント
オンデュル語で答えないでください。

西村教論のコメント
補習するか？

松風翔平のコメント
いいえ、間に合っています。

第１８話ー現国とＦＦＦ団とＡクラス

前回のあらすじ：
雄二「みんな、Ｃクラスとの試験召喚戦争まであと１日、明日だ。まずは作戦の確認をしておく。まず、松風を中心に敵陣をたたき、スキを付いて先生の雑用として使われて召喚獣の使いになれている明久がＣクラス代表である小山（こやま）　友香（ゆうか）をたたく作戦だが、これでいいか」

明久「ああ」

秀吉「異議なし」

ムッツリーニ「・・・・・・同じく」

美波「ないよ、」

姫路「ありません」

正夫「いいんじゃない」

翔平「問題ないな、少し単純だがいけるだろう」

イクサベルトＶ２「イ・ク・サ・ブ・レ・イ・ク・ラ・イ・ズ・ア・ッ・プ」

イクサＶ２「そりゃ！」

ドッグファンガイア「ぐわあああああ！！！！」

明久「あっ、あの・・・
あなたは誰ですか？」

イクサ「仮面・・・ライダー・・・仮面ライダーだ」

明久「仮面・・・ライダー・・・」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ｓｉｄｅ翔平
ガラガラガラガラ←ドアを開ける音

翔平「おっはーー、」

明久「ホントなんだって、見たんだよっ！」

翔平「どーしたーー」

明久「昨日見たんだよっ、仮面ライダー！なのに誰も信じてくれないんだよ！」

翔平「そっか、多分みんな今日の試召戦争に頭がいっぱいなんだよっ、」
さっそく言ってるぜ、仮面ライダーの事・・・あん時正体あかしたほうが良かったかな～でもヒーローは正体明かさないからな～

そして時は試験召喚戦争、開幕の時間へ

翔平「みんなっ、しまっていくぞーー！！！」

Ｆクラス「オオーーーー！！！」

フィールド発生・・・、教科は・・・・・・・

現代国語！

翔平「よしっ、ムッツリーニの読みとおりだっ！みんなっ、復習（一部召喚獣訓練）の成果を見せてやれっ！」

特攻隊は、ムッツリーニのデータによる、現代国語が得意なヤツを次々と道ずれにした。これだけ道が開けば進入できるだろう。

翔平「松風翔平！・・・敵陣地に武力介入するっ！」

正夫「紅正夫、翔平を援護するっ！」

明久「吉井明久！観察処分者の力、敵に見せ付けてくる！」

姫路「姫路瑞希、Ｃクラス代表・小山友香（こやまゆうか）の首、とります！」

秀吉「木下秀吉、戦争混雑に助太刀いたすっ！」

ムッツリーニ「土屋康太・・・・・目標を斬る、」

翔平・正夫・明久・姫路・秀吉・ムッツリーニ「「「「「「「サモン！」」」」」」」

みんなそれぞれの召喚獣をサモンした。中でも姫路さんの召喚獣は始めてみた。西洋風の鎧に巨大剣のスタイルだ。

翔平「さーて、行きますか！」

俺の一声で召喚獣たちはＣクラス内部へ突入した。

『Ｃクラス生徒　現代国語１５７点　ＶＳ　Ｆクラス松風翔平　現代国語５３４点』

翔平「そりゃ！」

『Ｃクラス生徒　現代国語０点』

翔平「しゃっ！」

俺はガッツポーズをとりながら言った。・・・どこぞの世界にもいたバカのように。

－－

しかし、状況は不利だ。俺たち精鋭と雄二以外のみんなはＣクラスとまともに戦えもしない奴等ばかりだ。こいつ等、『リア充』たち相手だとものすごい強いのに！・・・待てよ、リア充？そうだ！リア充を餌にこいつ等を動かせばいいんだ！

翔平「ムッツリーニ！Ｃクラスの中で最もリア充な奴、知っているか！？」

ムッツリーニ「・・・知ってる。×野〇尾という奴がBクラスの女子と・・・」

翔平「Fクラス諸君、聞いてくれ！」

Fクラス「何だ？」

翔平「Cクラスの×野〇尾は、Bクラスの女子と付き合ってる、俺たちの敵、『リア充』なんだ！」

Fクラス「何だって！」

翔平「みんなはこれを許していいと思うか！」

Fクラス「許すもんかーー！」

翔平「そうだ！奴等リア充を許してはならない！なら、われ等どうする？妬むか？呪うか？・・・しかし！そんなことはただの子供の嫌がらせにしか過ぎない！」

Fクラス「！」

翔平「われ等は勉強ができなければ、もてもしない！なら、われ等の使命はリア充を1人残らず！・・・・・・倒すだけだ！・・・俺はここに対リア充異端審問会『FFF団』を結成するっ！」

Fクラス「オー！」

俺が今作り出したFFF団の団員は全員黒覆面と黒マントを着用し

た。

明久「へえーカッコいいな・・・」

秀吉「それより松風よ、なぜお主の召喚獣の服装と武器が変わっているのじゃ？」

秀吉の言葉で気がついた。俺の召喚獣の格好は、『コードギアス反逆のルルーシュ』にでてきたゼロの着ていた服装に似たものを着ており、武器もレイピアひとつに変わっていた。これはもしかしたら・・・対リア充用の武装なのか？

翔平「・・・そんなのはどうでもいい、それよりあいつ（Ｃクラス代表・小山友香）の首とるぞ、」

『Ｃクラス小山友香　現代国語３１９点　ＶＳ　Ｆクラス松風翔平　現代国語４８５点』

翔平「小山Ｕか覚悟ー」←棒読み

小山「字い間違っている！」

『Ｆクラス　小山友香　現代国語０点』

・・・またしても俺たちの勝ちか

一方、×野〇尾はと言うと・・・・・・・・・・・・・・・

×野〇尾「ぎゃあああああ！！！！！！！！」

ＦＦＦ団員「死ね、リア充！マジで死ね！死ね！死ね！死ね！そして死ね！」

×野〇尾「ぎゃあああああ！！！！！」

『Ｃクラス×野〇尾　現代国語０点』

ＦＦＦ団員「やったーー！！！リア充は消えた！我々の勝利だ！」

ま、まあ勝ちであることに変わりは無いか・・・

翔平「みんなちゅうもーくっ！」

翔平「われ等はリア充を嫌う異端審問会、『ＦＦＦ団』だ！現実生活が充実しているものよ！われ等を恐れよ！現実生活が充実していないものよ！われ等を求めよ！許されてはならない現実生活が充実しているリア充達は、われ等が裁く！」

そして俺たちはＣクラスと設備の交換をした。しかし、それもつかの間・・・思いもよらぬ展開が・・・

ガラガラガラガラ↑ドアを開ける音

そこには秀吉の姉でＡクラスの実力者、木下優子（きのしたゆうこ）がいた。

優子「私達Ａクラスは、Ｆクラスに宣戦布告しますっ！」

第１９話－閃光のＦ／獣の切り札

前回のあらすじ：

翔平「松風翔平！・・・敵陣地に武力介入するっ！」

正夫「紅正夫、翔平を援護するっ！」

明久「吉井明久！観察処分者の力、敵に見せ付けてくる！」

姫路「姫路瑞希、Ｃクラス代表・小山友香（こやまゆうか）の首、とります！」

秀吉「木下秀吉、戦争混雑に助太刀いたすっ！」

ムッツリーニ「土屋康太・・・・・目標を斬る、」

翔平・正夫・明久・姫路・秀吉・ムッツリーニ「「「「「「「「「「サモン！」」」」」」」」」」

翔平「そうだ！奴等リア充を許してはならない！なら、われ等どうする？妬むか？呪うか？・・・しかし！そんなことはただの子供の嫌がらせにしか過ぎない！われ等は勉強ができなければ、もてもしない！なら、われ等の使命はリア充を１人残らず！・・・・・・倒すだけだ！・・・俺はここに対リア充異端審問会『ＦＦＦ団』を結成するっ！」

翔平「われ等はリア充を嫌う異端審問会、『ＦＦＦ団』だ！現実生活が充実しているものよ！われ等を恐れよ！現実生活が充実していないものよ！われ等を求めよ！許されてはならない現実生活が充実しているリア充達は、われ等が裁く！」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ｓｉｄｅ翔平

昨日、秀吉の姉でＡクラスの実力者、木下優子が宣戦布告してきた。決戦は、後２日。普通の試召戦争とは違って、一騎打ちの戦いだ。

一騎打ち・・・それは一対一で戦う事、つまり一回の戦いで全てが決まる。

なぜ一騎打ちになったかというと、集団戦ではＡクラスでは勝てないからだ。タイマンなら、俺や姫路さん・・・後たまーにやる気を出せばスゲー賢いフィリップに勝機はある。勝負は８回まである。

俺は鳴海探偵事務所に来た。昨日、フィリップが学校に来なかったから様子に来たからだ。

コンコン↑ドアをノックする音

あれっ、ドアが開いてる・・・

ガチャ・・・↑ドアを開ける音

翔平「おじゃましまーす・・・」

誰もいない・・・どういうことだ？俺は秘密基地みたいな部屋に入った。そこには一人、フィリップがいた。

フィリップ「松風・・・翔平・・・」

翔平「翔太郎さんたちはどうした？」

フィリップ「翔太郎や亜樹ちゃんは・・・ドーパントに捕まっている・・・・・・・・」

翔平「はっ？助けにいかねーの？仮面ライダーだろ？お前、変身できないの？」

フィリップ「しようと思えば・・・できる。でも、したくないんだ。」

翔平「なんで？」

フィリップ「説明しよう・・・僕と翔太郎が変身する仮面ライダーWは、翔太郎の体で変身し、僕の精神が翔太郎に移るんだ。それにはメモリを入れる必要がある。でも、相手のドーパントの仕業でメモリを入れるスロットが塞がれてるんだ・・・だから変身できない。」

翔平「フィリップ・・・お前、俺の質問に答えてないぞ・・・」

フィリップ「・・・」

翔平「お前は『したくない』って言ったよな、それはつまり、お前の体でライダーに変身できるんだろ？どうして、それだけのことが

したくないんだ？」

フィリップ「・・・実は僕が変身するためには、翔太郎の体で変身する時のメモリとはちがうメモリを使わなければならないんだ。」

翔平「いったいどんなメモリだ？」

フィリップ「君の持つメモリは・・・生きてはいないよね？」

翔平「当たり前だ・・・」

フィリップ「でも、僕の体で変身するのに必要なメモリは自らの意思で行動しているため、居場所だ特定できないんだ・・・」

生きたメモリ・・・でもこれがどうして変身を避ける理由につながるんだ？

フィリップ「僕がそのメモリを使って変身すると、僕の意思とは関係なく、暴走するんだ・・・」

翔平「なるほど、猛戦士（バーサーカー）ていうわけか。だけど、そんなのただの言い訳にしか過ぎないぜ。」

フィリップ「！？」

翔平「お前、翔太郎さんたちを助けたいって思わないのか！？」

フィリップ「そりゃ・・・助けたいさ」

翔平「なら行け、もしお前が暴走したら、俺がお前を止める、それ

ならいいだろ。」

フィリップ「しかし・・・」

翔平「俺は明日そこ行くぜ、お前が来ることを信じているからな・・・」

フィリップ「ちょっと！」

俺は去っていった。

ｓｉｄｅフィリップ

翔太郎や亜樹ちゃんを助けろ・・・君に言われなくてもそうしたいさ、でも・・・（！）

ファングメモリ「ギャァーァオッ！」

フィリップ「ファング！まさか、君が来るなんて・・・」

でも、今はこうするしかない・・・たとえ暴走しても、翔太郎や亜樹ちゃんを・・・僕の大事な人たちを・・・！

次の日

ｓｉｄｅ翔平

ここか、翔太郎さんや亜樹子さんは・・・いた！後変なドーパントも！

アームズドーパント「さーて、お前達のお仲間が来るか・・・なあ！」

翔平「呼ばれて、飛び出て、ジャジャジャジャーン♪」

アームズドーパント「なんだお前!?」

翔平「噂の仮面ライダーでーっす!」

アームズ「フン、まあいい・・・こいつ等を殺すか」
アームズは剣を構えて、翔太郎さんを切ろうとしたそのとき・・・

ファングメモリ「ギャォーギャォーッ!」
ファングが剣を噛んでとめていた。

翔平「へえ、あれが生きたメモリねえ・・・」
ファングはアームズから後退した。そこにいたのは・・・

フィリップ!

翔太郎「まてっ!フィリップ!それは・・・!」

フィリップ「翔太郎、さいごまで悪魔と相乗りする勇気、あるかな!?」

ファングメモリ「Ｆａｎｇ!」

翔太郎「やめろ!フィリッ・・・」
翔太郎さんの意識とともにダブルドライバーにささったままのジョーカーメモリがフィリップのダブルドライバーに移動された。

フィリップ「変・・・身!」

ダブルドライバー「Ｆａｎｇ－Ｊｏｋｅｒ！」

「アエェェエンェン…！！（シュゴォォオ！！）」（ファング変身音＆発光）

「（ジャギィーン）バンバンバン！！」（ジョーカー変身音＆発光）

フィリップの体はたちまち仮面ライダーＷ　ファングジョーカーに・・・

Ｗ－ＦＪ「うわあああああ！！！！！！！」

ファングメモリ「Ａｒｍ－Ｆａｎｇ！」

Ｗファングジョーカーの右腕にファング（牙）のようなものが装着された。

アームズ「ぐわあああああああ！！！」

そして・・・

ファングメモリ「Ｓｈｏｕｌｄｅｒ－Ｆａｎｇ！」

アームズ「ぐわあああああああ！！」

ファングメモリ「Ａｒｍ－Ｆａｎｇ！」

Ｗは俺に攻撃しようとした。

翔平「ヲイ。」

一方Ｗの中ではこんなことが・・・

フィリップ「信じていたよ。僕を見つけてくれるって。」

翔太郎「ああフィリップ、行くぜ。」

＊＊＊＊＊

Ｗ－ＦＪ「命拾いしたね、あと少し遅れたら、確実に死んでたよっ」

翔平「自我が戻ったか、」

Ｗ－ＦＪ「ああ、それより」「ああ」

Ｗはアームズドーパントのほうを向き・・・

Ｗ－ＦＪ「「さあ、お前の罪を数えろ！」」

ファングメモリ「Ｍａｘｉｍｕｍ－Ｆａｎｇ！」

Ｗ－ＦＪ「ファングの必殺技だからえーと、・・・ファングストライザーなんてどうだ？」「君に任せるよっ」「「ファングストライザー！」」

アームズドーパントのメモリは壊れた。これにて一件落着だな。あっ、俺今回全く目立ってないぞ。

Ａクラスとの試召戦争まで・・・あと１日。

第２０話　午前と一騎打ちと成績（前書き）

バカテスト―ｂａｋａ　ｔｅｓｔ―
問題：「初めは勢いがよいが、終わりは振るわないこと」という意味の四字熟語を答えよ。

姫路瑞希の答え
竜頭蛇尾

教師のコメント
正解です。竜の頭は迫力がありますが、後ろにいくごとに蛇のようにひょろひょろとなっていくということですね。

土屋康太の答え
セッ○ス

教師のコメント
あなたの珍回答に先生はいつもひやひやです。

吉井明久の答え
人生

教師のコメント
あなたはなにを言っているのですか？

松風翔平の答え
影山瞬

教師のコメント

その人に失礼です。

第２０話ー午前と一騎打ちと成績

前回のあらすじ：
フィリップ「説明しよう・・・僕と翔太郎が変身する仮面ライダーWは、翔太郎の体で変身し、僕の精神が翔太郎に移るんだ。それにはメモリを入れる必要がある。でも、相手のドーパントの仕業でメモリを入れるスロットが塞がれてるんだ・・・だから変身できない。」

翔平「フィリップ・・・お前、俺の質問に答えてないぞ・・・」

フィリップ「・・・」

翔平「お前は『したくない』って言ったよな、それはつまり、お前の体でライダーに変身できるんだろ？どうして、それだけのことがしたくないんだ？」

フィリップ「・・・実は僕が変身するためには、翔太郎の体で変身する時のメモリとはちがうメモリを使わなければならないんだ。」

フィリップ「変・・・身！」

ダブルドライバー「Ｆａｎｇ－Ｊｏｋｅｒ！」

「アエェェエンェン…！！（シュゴォォオ！！）」（ファング変身音＆発光）

「（ジャギィーン）バンバンバン！！」（ジョーカー変身音＆発光）

Ｗ－ＦＪ「「さあ、お前の罪を数えろ！」」

ファングメモリ「Ｍａｘｉｍｕｍ－Ｆａｎｇ！」

Ｗ－ＦＪ「ファングの必殺技だからえーと、・・・ファングストライイザーなんてどうだ？」「君に任せるよっ」「「ファングストライザー！」」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ｓｉｄｅ翔平

『私達Ａクラスは、Ｆクラスに宣戦布告しますっ！』

秀吉の姉、木下優子がＦクラスに入ってきてこの言葉を言ってから３日たつか。今日が試召戦争当日。もっとも、圧倒的な戦力差あってかこっちにも多少の勝機がある一騎打ちだが。

雄二「今日がＡクラスとの試召戦争当日だ。今回の戦争は通常のものとは違い、選抜メンバーで戦う『一騎打ち』だ。メンバーは、・・・」

一騎打ちのメンバーは俺と正夫と明久とムッツリーニと姫路さんと雄二と美波、そしてフィリップの８人だ。俺や姫路さんにフィリップは本当ならＡクラスの実力を持っているから絶対はずせないだろう。ムッツリーニは（性的な意味での）保健体育では教師並の得点を持っているし、・・・あとはまあ他の奴等よりはマシって事だけ

かな。明久は観察処分者で召喚獣の使い方は慣れてるし、雄二はまあ、代表だから出なきゃいけない・・・だけ？美波は数学はＢクラス並だし、・・・正夫はまあ総合的にいいのか。

※みんなに分かりやすく説明するために、Ｆクラス選抜の点数のデータを見てもらう。

俺ー現代国語　７５９点
数学　８２０点
物理　７３７点
科学　７１４点
古典　７４６点
英語　１０５８点（得意科目）
保健体育　７６２点
現代社会　７７１点
世界史　７０３点
日本史　５６２点（苦手科目）

総合　７６０２点
平均　７６０．２点

正夫ー現代国語　８６点
数学　７２点
物理　６１点
科学　８３点
古典　４３点　（苦手科目）

英語　６９点
保健体育　９４点
現代社会　１９３点（得意科目）
世界史　５７点
日本史　６７点

総合　８２５点
平均　８２．５点

明久一現代国語　３１点
数学　２４点
物理　５２点
科学　６４点
古典　３１点
英語　２７点
保健体育　６４点
現代社会　４９点
世界史　４３点
日本史　２５点

総合　４１０点
平均　４１点

ムッツリーニ一
現代国語　３８点
数学　３１点
物理　１５点

科学　１７点
古典　２４点
英語　２９点
保健体育　５７６点
現代社会　２３点
世界史　２９点
日本史　２１点

総合　８０３点
平均　８０．３点

姫路一　現代社会　４６２点
数学　５１５点
物理　３９３点
科学　４３９点
古典　４５２点
英語　４２５点
保健体育　４３０点
現代社会　４１２点
世界史　４２８点
日本史　４５３点

総合　４４０９点
平均　４４０．９点

美波一　現代国語　１６点
数学　２１３点
物理　３７点

科学　２９点
古典　９点
英語　５８点
保健体育　２８点
現代社会　２３点
世界史　３７点
日本史　１４点

総合　４６４点
平均　４６．４点

雄二　現代国語　６２点
数学　５９点
物理　６０点
科学　４８点
古典　５６点
英語　３０点
保健体育　６７点
現代社会　５３点
世界史　５１点
日本史　６４点

総合　５５０点
平均　５５点

フィリップ―本気を出したことがないため不明。

現在、午前１０時。試験召喚戦争・一騎打ちが始まるのは午後。負ければせっかくＣクラスから試召戦争で奪い去って手にいれた今の設備も無くなる。

雄二「なあ松風、」

翔平「なんだ、雄二？」

雄二「Ａクラスと戦った後のことなんだが・・・」

翔平「・・・そうか。確かに万が一勝っても、次は普通の試召戦争しかできないしな・・・」

雄二「つーわけだ。他の奴等に言っても納得できねーだろうから今は俺とだけでだ。」

翔平「ああ分かっている。がんばろう。」

風都高校新聞ー特別号

風都高校新聞ー特別号
Ａクラス対Ｆクラス戦、本日午後に開戦！

最近、試験召喚戦争を行い、次々と勝利している２年Ｆクラスが何と、Ａクラスに宣戦布告をしたという情報を新聞部が捉えた。
最初はワンランク上位のＥクラスを倒し、次はＣクラスと戦い、勝利した。

※ちなみにその際、リア充を憎む『非リア（充）』の味方、異端審問会、『ＦＦＦ団』が誕生した。ちなみ、『ＦＦＦ団』の会員は募集中なので、入会したい方は、会長の須川亮（すがわりょう）くんに入会の許しをもらいましょう。

まさかの最下位クラスが次々と上位クラスを倒すという快挙に学園中が話題になった。
その勝利の秘訣を探るべく、我々は調査を行った。
調査の結果、Ｆクラスには代表の坂本雄二を始めに、学年次席にもっとも近い姫路瑞希、そして数学においてはＢクラス並の島田美波、やる気を出せばＡクラス並の頭脳を持つ左将暉、保健体育において右に出るものはいない土屋康太、そして学力は関係ないが、この学校きっての稀代の美少女・木下秀吉（本人曰く、ワシは男じゃ）２学年きってのバカの代名詞と言われる『観察処分者』の称号を持つ、吉井明久、そして、『観察処分者』を越える称号『黒の完全処分者』の松風翔平。

Ｆクラスには少なくとも３人はＡクラスのトップの成績を持っている。いったい誰が勝つのか？火蓋が切って落とされる。

第21話－Episode of SHOUHEI（前書き）

今回は翔平の過去についての話なのです。

第21話ーEpisode of SHOUHEI

side翔平

一昨日の夜、俺は夢を見ていた。もしかしたら、Aクラスに昔懐かしいヤツがいるからだ。　・・・霧島翔子(きりしましょうこ)が。

俺と霧島が始めてあったのは小学4年の時、俺はこの町、風都に引っ越してきた。

翔平『ここが今日から通う小学校か、・・・職員室どこだろ。転入手続きしないと。』

俺はその日、学校に来たが、職員室が分からず困っていた。俺はとりあえず近くにいた女子生徒の話しかけた。　・・・霧島だ。

翔平『あの～』

霧島『なに?』

俺はしばらく見とれていた。・・・黒い長髪で日本人形みたいで、とても可愛いかったからだ。

霧島『・・・用事は?』

翔平『あ、職員室ってどこ?転校してきたばかりでよく分からなくて・・・』

霧島『・・・そこの角を曲がった所』

翔平『あっ、ありがとう』

そして数分後、職員室へ行き先生と共に教室へ行った。

さてと・・・自己紹介だ。

翔平『松風翔平です。趣味は（・・・）喧嘩やらまあ、色々です。ヨロシク。』

担任『・・・そ、それでは松風くんの席は霧島さんの隣の席で、その席に着席してください』

翔平『ふぁーいっ、（・・・！）』

俺の隣になる人は、朝あったあの娘だ。

翔平『ああ、霧島さん・・だっけ。ヨロシク！』

俺は右手でサムズアップを決めた。

霧島『・・・よろしく。』

そして時は下校時間。俺はひとりで家に帰っていた。

翔平『ふぁあ～～・・・眠い・・・あっ』

俺はあくびをしながら家に向かっていた。その途中、霧島が信号が赤になっていることに気付かず、横断歩道を渡っているのが眼に入った。

翔平『霧島！』

霧島『えっ？・・・！』
俺の呼び声で霧島がやっと現状を理解した。そしてそのときちょうどトラックが霧島のところに走っていた。
翔平『危ないっ！』
俺は全力で走った。・・・ランドセルは邪魔なのでおろしてから。

ギリギリ・・・助かった。

ドガッ

翔平『痛つつつつつ・・・・』
俺は電柱に頭をぶつけた。

翔平『だっ、大丈夫？』

霧島『うっ、うん。あの・・・』

翔平『あれっ？ランドセルどこだ？』
俺はあたりをキョロキョロ見渡した。ランドセルが合ったのは・・・・・・横断歩道の真ん中・・・

翔平『やべー！！俺の・・・俺のランドセルーー！！』

これが俺と霧島の出会い。

そしてこの一件からなのか、俺と霧島は徐々に仲良くなっていった。

そして４年での遠足では・・・

担任『では、お昼ご飯を食べてください』

クラス全員(おそらく)『いただきます！』

４年のころ、遠足で風都タワーの近くにある公園に来ていた。

翔平『ふう・・・』

俺は一人でオムライスを食べていた。

霧島『・・・ねえ、何でいつもオムライス食べているの？』

俺の通う学校は給食がでない、だから弁当を持っていっていかないといけない。俺の弁当の中身の大半は、オムライスだ。

翔平『好きだからって言う理由以外に何かあるか？俺はこう見えても『（自分で作った）素晴しきオムライスの会』の会長だからなっ』

霧島『・・・ねえ、お昼１人なの？』

翔平『別にいいだろ。それに俺は１人の方が好きなんだ』

あの時はそういったけど、あれは嘘だ。当時の俺は、友達は作るのが苦手だった。

霧島『・・・なら一緒に食べよ』

そう言いながら、霧島は俺の近くに座ると、俺にある事を言った。

霧島『・・・翔平は１人じゃないよ。１人だと思っていても、他の

人は翔平の事を思っているから・・・』

そして5年生のころ、事件が起きた・・・

翔平『ぐわっ！』

生徒A『どうだ、痛いか？痛いかよー！』

生徒B『いつも遊んでいるくせによっ、テストでいい点取りやがって！』

生徒C『お前なんか死んじまえばいいんだ！』

理不尽な理由でいじめを受けていた、5年生のころ。

生徒C『オラァ！ギブか？コラァ！！なんか言えよ！』

生徒A『泣きたきゃ泣けよ！アン！泣けよ、泣けよ！』

・・・カス共が・・・俺は内心そう思っていた。もし俺がここで手を出したら間違いなく退学だろう。こんなカス共のために退学になる気はさらさら無かった。

ガラッ↑ドアが開いた音

教室でいじめられているのか、教室に入ってきたやつがいた・・・

霧島・・・

霧島『・・・なにを・・・しているの・・・？』

生徒B『あ？見てわかんないかよ！？こいつがムカつくから殴っているだけだよ！』

生徒A・C『『へっへっへっへっ・・・』』

・・・もういいんだ霧島。俺にかかわるな。お前にまで危害が加わる。

霧島『・・・間違っている』

生徒A『アン？なんていったよ？オラァ！なんか言ったか！アン！？』

霧島『そんな理由で翔平をいじめるのは・・・間違っている』

生徒C『はっ？コイツの肩を持つ気か？！霧島お嬢様よ！！えっ！？』

生徒B『コイツのせいで俺のテストが一番じゃなくなったんだぜ！？こいつが居るから！！お前だってそうだろ！？』

霧島『それでも・・・翔平をいじめる理由にはならない・・・』

霧島・・・

生徒B『立ったらさ～・・・お前も死ねよっ！』

奴等は生徒Aに俺を拘束させて、2人は霧島をいじめだした。

生徒A『へっ、いい眺めだな！』

霧島『キャッ！痛い！止めて！』

生徒C『やーだね！ひゃ―はははは！！！』

翔平『・・・よくも・・』

生徒A『アン？』

翔平『よくも俺だけじゃなくて！霧島をいじめたな！！！』
俺は生徒Aに蹴りをかました。

生徒A『ぎゃあああ！！！』

くるっ↑俺が生徒Cの方向に振り向く音

生徒C『ひっ！』

翔平『よくも！』
俺は生徒Cにラリアットを決めた。

生徒B『おいおい、そんなことしたら退学だよ！？』

翔平『知るか、先にやってきたのはお前達のほうだぜ。・・・俺だけになら、まだ我慢はできた。・・・なのに！どこに霧島をいじめる理由がある！あいつがお前に何かしたか！？』

生徒B『・・・』

翔平『黙っていちゃあ分からないだよ！・・・１０秒だ・・１０秒以内に理由を述べよ。これくらいならできるだろっ　１０・・・９・・・８・・・７・・・６・・・５・・・どうした？時間がどんどん

無くなっていくぞ！？』

生徒B『えっ・・・えっ・・と』

翔平『・・・4・・・3・・・2』

生徒B『アイツが！・・・お前の肩を・・・持つから・・・』

翔平『・・・2・・・・・・1・・・0・・・・。時間切れだ。俺の判決を言い渡そう・・・死だ！！！』

生徒B『まっ待てよっ！』

翔平『先に『死ね』といってきたのはお前だ・・・違うか？・・・・まあいい、少し重すぎたな。軽くしてやろう・・・』

俺はハイキックから、ボディスラムを決めた。

翔平『はあ・・・はあ・・・はあ・・・霧島、大丈夫か？』

俺は霧島に手を伸ばした。しかし・・・

パチンッ！

翔平『！』

霧島『・・・こわいよ』

恐怖により、俺は手をはたかれた。

＊＊＊＊＊＊＊＊

目が覚めた。Aクラスとの戦争まであと1日・・・

今日はドーパントに捕まった翔太郎さんたちを助けないと・・・！

第22話－Ｅｐｉｓｏｄｅ　ｏｆ　ＳＨＯＵＨＥＩ　？

ｓｉｄｅ翔平

昨日の夜も、俺は夢を見た。・・・一昨日の夢の続きだ・・・

翔平『よくも俺だけじゃなくて！霧島をいじめたな！！！』

翔平『はあ・・・はあ・・・はあ・・・霧島、大丈夫か？』

俺は霧島に手を伸ばした。しかし・・・

パチンッ！

翔平『！』

霧島『・・・こわいよ』

恐怖により、俺は手をはたかれた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この一件で、俺は退学になった。・・・そして俺は新しい学校でも溶け込めずにいた。そして、俺は中学1年へ・・・近所の国立の中学校、『風都国立大学付属中学校』の中学1年生として、入学した・・・そしてなんの運命なのか、霧島も・・・この中学校に入学していた・・・

2年の春、俺は理科の授業が大嫌いだった。理科そのものが嫌いだったわけではなく、教師が嫌いだった。そのときの教師は、後に俺への復讐の為にビーメモリを使って、ビードーパントに変身した『港文也』だ。

ある日、俺はその教師にセクハラをしているのを見た。最初は別に気に留めずにほうっておいた。・・・変に関わると、面倒なことになると思ったからだ。ある日俺は、その理科教師が霧島にセクハラをしているのを見た。

俺が図書館でレポートのための資料を集めて教室に戻ろうとしていたときだ。教室に戻るには、理科の教室を通り過ぎる必要があった。そのとき俺は理科室から声がしてくるのが聞こえた。男と女の声・・・男のほうはすぐに港文也だと気付いた・・・女のほうの声は、なつかしい声だった。最初は誰だか分からなかったが、会話を聞いているうちに霧島だと分かった。

港文也『なあなあ霧島君!?いいだろ!?ねえ!!』

霧島『止めてください!』

霧島が教室から出てきた。いつもは落ち着いていた霧島が、あんなに嫌がるのは初めてだ。いつもちゃんと着ている制服も、わずかだが乱れていた。多分あいつに脱がされそうになったのだろう。

霧島『・・・!』

俺と霧島の目が合った。霧島はすぐに駆け足で教室のほうに向かっ

た。

港文也『・・・チッ！』

アイツは教室の中で舌打ちをしている。・・・今すぐにでも殴りたい、そう思っていた。でも、そんなことすれば退学になるのは明白だ。暑くなりすげてはダメ・・・俺は考え抜いた末、犯罪ではあるがハッキングをすることに決めた。

ポキポキ・・・↑指を鳴らす音

翔平『アイツのコンピューターの中は・・・』

カタカタカタカタカタカタカタカタカタカタ・・・・・・・

翔平『アイツのコンピューターに接続・・・・・・！これは！』

俺はひとつの動画をアイツのパソコンからダウンロードした。そこには・・・

翔平『へっ、これは使える！これを校長のパソコンに転送すれば・・・！』

次の日・・・学校の掲示板にはこのようなことが載っていた。

『港教論、教育職員免許　廃止』

たくさんの人たちが見ている。その中には霧島もいた。

秀吉『ほう、何事じゃろうな』

明久『港先生クビだってさ。いや～良かった、俺あの人好きじゃな

かったから。』
俺は明久や秀吉と仲が良かったので、よくいっしょに行動していた。
秀吉『しかし何でまたいきなり・・・松風はどう思う?』
翔平『なんかしでかしたんじゃないの?』
俺は霧島を見ながら行った。・・・アイツ大丈夫かな・・・そう思っていると、隣にいたヤツがへんなこと言った。
隣人『なあしっているか?港先生がクビなったわけ?あの人プライベートでSMプレイやっていてさあ、それが先生にばれたんだってさ!』
コイツの言っていることは本当だ・・・港文也のパソコンに保存されていた動画には、港文也がSMプレイを受けている映像が、たっぷり1時間あったからだ。・・・まあ、俺は気持ち悪くなって、最初の5分しか見てないけど・・・
秀吉『じゃが誰がやったのじゃろうな?』
翔平『さあな・・・たぶんこの学校内にいるって言うことは確かじゃないか?』

そしてその一年後の冬・・・俺たち3年生はスキー合宿に来ていた。
明久『へえ~翔平けっこう上手いじゃん』
翔平『まあな、小学4年のとき、学校でスキー合宿に行ってで滑っ

たことあるから。』

明久『へえ～じゃあ俺にも教えてよ！』

秀吉『ワシにもっ！』

翔平『ああいいぜ』

午後６時・・・全員集合の時間だ。しかも学年全員集まったかチェックしないといけないから、遅れてきたやつのせいで部屋で休む時間は遅くなる。

１０分経過。いつまでたっても部屋で休めない。ったくいったいどんなバカが遅れているんだ？そのとき、教師の声が聞こえてきた。

教師（Ｃ組の霧島さんはまだ来ないんですか？）

教師（ええ・・・、まずはみんなを部屋に帰すべきかと・・・）

・・・霧島が遅れている？そんなはずは無い。あいつはいつも真面目で、送れることなんて絶対にありえない。・・・いったいどうして？

教師『え～では、皆さん部屋に戻ってください。』

生徒一同『は～い』

俺はみんなが移動するどさくさにまぎれて、外にでた。・・・どこかに霧島がいるはずだ。俺は外においてあったスノーボードをとって霧島を探し始めた。

翔平『おーい霧島！どこだ！』
ふぶきも降ってきて、視界はさらに悪くなった。・・・もうだめかそう思ったとき、霧島の声がかすかに聞こえた。

霧島『たす・・・けて・・・』

翔平『霧島！』
霧島は雪に埋まって動けない状態だった。俺は必死の思いで霧島を助けた。

翔平『ダメだ・・・この吹雪じゃ帰れない！』
もうダメか・・・そう思ってたとき、何故かちょうどいい大きさの洞穴を見つけた。とりあえずそこに入ってみることにした。入るとすぐに木の枝があったので、俺は持ってきたライター（本当は持ってきてはダメだが）で火をつけた。

翔平『なるほど・・・今日はここで就寝か・・・』
俺はそう言いながら二重にしてきていたフリースのひとつを霧島に着せた。

翔平『冷えるだろうから、これも着ておけ』

霧島『・・・ありがとう』

俺はバックの中に入れておいたお菓子を出した。

翔平『食えよ。くわねーと明日動けないぞ。』

霧島『うん、ありがとう』

一通り食べたら、俺はカバンから布団を出した。

翔平『これかけて寝ろ。お前は雪の中で埋まっていたから体温が下がっているんだ。』

霧島『えっ、でも・・・』

翔平『俺はいいんだ。寒さとか強いし。』
ハックション！思わずくしゃみをしてしまった。だが俺は気にせずに横になった。

翔平『お休み』
寝ようとしたとき、霧島が俺な横に来て、俺にも布団をかけた。

霧島『・・・となり、いいかな』

翔平『好きにしろ。』

霧島『・・・ありがとう、おやすみ』
そして霧島はすぐに眠りに付いた。俺は寝返って霧島の顔を見た。
・・・可愛い俺は改めてそう思った。

夜は明け、吹雪もやんだ。俺と霧島は合宿先に付いたのは、９時３７分のこと。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

目が覚めた。今日がＡクラスとの戦争の日。今日のためにがんばってきたんだ。

・・・なんとかなるさ！

第２３話 一開戦と一騎打ちと八本勝負（前書き）

バカテスト―ｂａｋａ　ｔｅｓｔ―
問題：「○気○沈」の○を埋めよ。

姫路瑞希・左将暉の答え
意気消沈

教師のコメント
正解です。ショックを受けたり、がっかりするなどで、何か次に行動を起こそうといった意欲などが無くなっているさま、という意味ですね。

土屋康太の答え
一気性沈

教師のコメント
ちゃんとした言葉で回答してください。

吉井明久・松風翔平
一気撃沈

教師のコメント
物騒な発言はよしてください。

第２３話ー開戦と一騎打ちと八本勝負

前回（第２０話）のあらすじ：
雄二「今日がＡクラスとの試召戦争当日だ。今回の戦争は通常のものとは違い、選抜メンバーで戦う『一騎打ち』だ。メンバーは、・・・」

雄二「なあ松風、」

翔平「なんだ、雄二？」

雄二「Ａクラスと戦った後のことなんだが・・・」

翔平「・・・そうか。確かに万が一勝っても、次は普通の試召戦争しかできないしな・・・」

雄二「つーわけだ。他の奴等に言っても納得できねーだろうから今は俺とだけでだ。」

翔平「ああ分かっている。がんばろう。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ｓｉｄｅ翔平
現在俺たちはＡクラスとの戦争のために特別に用意されたステージにいる。

俺たちFクラスは雄二を代表に俺、正夫、フィリップ、明久、ムッツリーニ、姫路さん、美波が出場する。

対するAクラスは霧島を代表に秀吉の姉　優子、工藤愛子、久保利光、佐藤美穂、学年次席である野上良太郎、草加雅人、風谷真魚のAクラスの中でも別格といわれる8人が出場する。

ちなみに秀吉は・・・

秀吉「なぜワシがラウンドガールを・・・」

翔平「いいじゃん、秀吉以外にだれがやるの？」

秀吉「ワシは男じゃ。それとムッリーニよ、なぜさっきから写真を撮る？」

高橋女史「では両選手、前へ」

一回戦の始まり。俺たちFクラスからは美波が、Aクラスからは秀吉の姉、優子が選手として出場する。

雄二「たのんだぞ、島田。」

高橋女史「教科は何にしますか？」

美波「数学でお願いします。」

ちなみに教科の選択はAクラス、Fクラス両方とも4回ずつ選ぶ事が出来る。

優子「さっさと終わらせるわよ。どうせ勝負にならないんだから。」

美波「言ってくれるわね、ウチは数学においてはＢクラス波の点数持っているんだから！」

美波・優子「「サモン！」」

美波の数学の点数は２１３点。対する優子は・・・

美波「４００点オーバー！？」

対する優子の点数は美波と２００点以上も差のある４５１点。

美波の召喚獣は一撃で倒された。

現在－０勝１敗

高橋女史「次の方、どうぞ」

まあ当然の結果として、２回戦に期待しよう。２回戦はＦクラスから、フィリップ、Ａクラスから、風谷真魚が出場する。

高橋女史「教科は何にしますか？」

真魚「現代国語で、お願いします。」

高橋女史「分かりました。教科で現代国語で承認します！」

真魚「試験召喚獣サモン！」

フィリップ「さてと、行くとするか・・・サモン！」

風谷真魚の召喚獣は、正装とクロークの格好に、武器は杖の姿だ。

フィリップの召喚獣は、風谷真魚と同じタイプの服装で、白いスーツの正装に青のクロークの姿。両腕にはWファングジョーカーのアームセイバー、ショルターセイバー、マキシマムセイバーのような物を装備していた。

『Ｆクラス左将暉　現代国語４５０点　ＶＳＡクラス風谷真魚　現代国語５０９点』

明久「５００点オーバー！？」

翔平「フィリップ、いけるか？」

フィリップ「大丈夫、問題ない。僕も一応４００点超えているからね」

『Ａクラス風谷真魚　現代国語４８６点』

真魚「くっ、でもっ！」

風谷真魚の召喚獣は杖からは光線のような物を出して攻撃した。

『Ｆクラス左将暉　現代国語４３２点』

フィリップ「なるほど・・・では腕輪の力を使うとするか・・・！」

翔平「腕輪か・・・」

明久「なあ、腕輪って何だっけ？」

翔平「お前は極上のバカか・・・・・・・・いいか、腕輪ってのはテストの点が単科目４００点以上の生徒の召喚獣に装備されるア

イテムだ。点数を消費することで腕輪に対応した特殊能力が使用できるんだ。でも、その特殊能力は千差万別・・・・・人によって能力も効果も違うんだ。そしてフィリップの腕輪の効果は・・・」

フィリップ「僕の腕輪の効果は『検索』。どんな攻撃にも弱点はある。僕の腕輪は敵の召喚獣の弱点を見抜き、それに応じて攻撃する。」

ｓｉｄｅフィリップ

さて、風谷真魚の召喚獣の弱点を探るとしよう。・・・彼女の武器は杖。近距離ではそのまま使い、遠距離ではビームが出る魔術師（ウィザード）のごとき武器。僕の召喚獣の武器は近距離用の武器でアームセイバーとマキシマム（レッグ）セイバー、中距離ではショルターファングが使える・・・

フィリップ「さて、いくとするか」

ｓｉｄｅ翔平

フィリップ「さて、いくとするか」

フィリップがそういうと、フィリップの召喚獣はショルターセイバーを投げた。それを杖で防御した風谷真魚の召喚獣にフィリップの召喚獣がアームセイバーとマキシマムセイバーを使って攻撃した。

『Ａクラス風谷真魚　現代国語０点』

これで１勝１敗

そして３回戦に――――

相手のクラスは佐藤美穂。一方、内のクラスは――――――

明久「いってきまーす」

翔平「負けるなら早く負けてこいよー。誰もお前が勝つとか、思ってないから」

明久「今に見てろ！ぜってー勝って見せるからな！」

一分後・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

明久「負けますた」

翔平「だろうな」

これで1勝2敗。後5回戦って勝てるかな。まあ、俺と姫路さんは大丈夫として、あと保健体育のムッツリーニ。

次回に続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2575x/

風都国立大学付属高等学校（仮）

2011年11月26日22時51分発行